魔皇が裁く

96ごま

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

闇に堕ちた兄は問う。正義とは何か。

光を浴びる弟は問う。栄光とは何か。

擦れ違ってしまった二人の皇子は追い求める。それぞれの信じる道の先にある、平和な世界を。例えその選んだ道が、血にまみれた地獄であろうと――

※この作品は皇帝陛下の兄という設定のラバックが主役です。

この作品では公式の名前がない皇帝陛下の呼び方にとても困る為、勝手ながら帝の字から取って『ミカド』という名前にさせて頂いてます。

目次

プロローグ
懐かしき幸福な日々 ―― 1
愛すべき国への疑念 ―― 4
衝突編
幻想と現実 ―― 10
家臣の陰謀 ―― 15
魔皇の誕生 ―― 19
夢から野望へ ―― 23
始動編
宣戦布告 ―― 28
逸れ者達との出逢いと発足 ―― 34
動き出す勢力 ―― 41
暗殺者と魔皇の邂逅 ―― 48
旧友との再会 ―― 54
ピンチはチャンス、スタイリッシュにキメる ―― 62

プロローグ
懐かしき幸福な日々

「――ていっ！やあっ！」
「ダメダメ。剣は思いっきり振れば良いってわけじゃないんだぞ、ラバック。もっと的をよく狙わないと俺に当たらないぜ」
　のどかな宮殿の中庭。風に揺れる芝生の上で木刀を振るうのは、二人の小さな少年達。
　親譲りの柔らかい緑の髪と瞳が自慢の少年ラバックは、異民族特有の褐色肌を持つ銀髪の少年、シュラからの指摘に従う。
「的を、狙って……こうだっ!!」
「おっ、少しは良くなったじゃねぇか。その調子その調子！」
　漸く届いたラバックの攻撃を同じ木刀で防いだシュラは、彼の些細な成長を自分の事のように喜ぶ。
　彼らは親が違う。歳も多少離れている。だがラバックが物心付く前から一緒に育ってきた二人は、本当の兄弟のように仲が良かった。
「よーし、今日はここまでだ！」
「えぇー!?もう終わりかよ!?」
「俺も後で自分の稽古で忙しいんだよ。悪ぃけどまた明日やろうな」
「むぅー！歳が違うからってシュラ兄と稽古が違うのは悔しい！俺もっと出来るもんっ！」
「ははっ、じゃあ次は俺の師匠みたいにもっと厳しくしてやるよ」
「望むところだっ!!そんでシュラ兄なんかすぐに超えてやるっ！」
「なんだとこの野郎～！そんな生意気な奴にはこちょこちょの刑だっ！」
「わっ!?や、やめっ…あははっ！ダメだって！くすぐったいよー！」
　シュラに両脇をくすぐられて笑いが止まらなくなるラバック。そんな子供らしい無邪気なじゃれ合いに、離れた場所から二人を見守る皇帝は愛おしそうに微笑む。
「おーい、お前らー！アタシだけ仲間外れなんて酷くなーい？」

「あ?・メズじゃん。お前また修行抜けてきたのか?」
　中庭の木の上からひょっこりと顔を出したのは、シュラと似た褐色の肌を晒し、長い金髪を二つに結っている少女メズ。
　羅刹四鬼の父を持つ彼女は幼いながらに皇拳寺で修行をしている身だが、こうして普段からよく寺を抜け出して二人と一緒に遊んでいた。
「ちょうど良いところに来たなメズ姉!・俺との戦いから逃げたシュラ兄の代わりに、お前が俺と勝負しろ!・」
「おおっ!・やる気満々だねぇ坊っちゃん!・良いぜ、へっぴり腰のお兄ちゃんの代わりに弟想いな優しいお姉ちゃんがいっぱい遊んでやるよ!・」
「お前ら揃ってなんで俺をビビり扱いすんだよ!?喧嘩売ってんのか!?」
　一番の歳上であるシュラを怒らせても、キャッキャッと楽しそうに笑うラバックとメズ。
　そんな三人の元に、彼らよりも更に小さな子供を抱いたラバックの母、皇后が訪れた。
「あにうえーっ!・」
「あっ、ミカド!・母上!・ごめんメズ姉!・俺ミカドと遊んであげなきゃいけないから勝負はやっぱり明日だ!・」
「うええっ!?マジかよ!?せっかくまた親父に叱られる覚悟で抜け出してきたのにぃー!!」
「じゃあお前もミカドと遊んでやれば?・俺様は忙しいから無理だけど」
「ハッ!・なるほど!・たまには良い事言うなシュラ兄!・流石アタシ達三人…いや、四人兄弟の長男!・」
「おいこら、たまにはってどういう意味だ」
　シュラがメズに文句を言うが、メズはそれを聞く前に早々とラバックに続いてその実の弟、ミカドの元へと駆け寄って行く。
　だがシュラはそんな彼女を怒る事はなく、慣れたようにやれやれと呆れた態度で見送った。

大好きで偉大な両親に見守られながら、弟や兄弟同然の親友二人と笑い合う毎日。そんな当たり前な幸せの日々が、ラバックはずっと、永遠に続くものだと思っていた。

……そう、あの日までは――

愛すべき国への疑念

とある日の夜。帝都宮殿の正門から少し離れた城壁の一角で、こそこそと怪しい動きをする少年が居た。

「へへっ。ここなら警備の奴らにも知られてねぇから、誰にもバレずに宮殿の外へ出られるぜ…！」

まだ十代になったばかりの少年である俺の名はラバック。現皇帝陛下の子息であり、長男である。では何故そんな高貴な身分の彼が夜中にこんな場所に居るのかと言うと……。

「ずぅーっと宮殿に引き籠ってるのはもう懲り懲りだからな。俺はこの狭い箱庭から出て外の世界を見るんだ…！」

宮殿の敷地内から一歩も外に出た事がなかった俺は、窓から見える帝都の街の風景をいつも羨ましそうに眺めていた。

勉強、稽古、鍛練。毎日その繰り返し。弟や友人と遊ぶ時間や師匠との鍛練は楽しいが、周りより賢く優れておりなんでも人並み以上に器用にこなせてしまって何の面白みもない退屈な日常に、心底飽き飽きしていた。だから、外の世界への憧れが強かった。

本や家臣達の話で聞いた知識でしか知らない、実際に見た事がない民達の暮らし。何不自由ない自分とは全く違う普通の日常や光景を、せめてこの目に焼き付けようと一人で宮殿からの脱走を試みた。

「――うわぁ～!!やっぱり帝都の街ってすげぇ広いなぁ～！あっ！でも夜に一人でこっそり来ちまったから、迷子にならないように気を付けねぇと…！」

街灯の灯りも少なく暗くてあまり見通せないが、それでも広く感じる街並みに、子供らしく好奇心旺盛だった俺はキラキラと瞳を輝かせる。

もう夜中だから人通りもない。一人で大通りを歩くのは寂しいような気もするが、この時は街の風景を見回すのに夢中で一切気にしていなかった。目に映るもの全てが初めて見るもので、ただ歩いてるだ

けなのにまるで冒険してるみたいに楽しくって仕方がない。だから、いつの間にか下町にまで来てしまっていた事に気付けなかった。
　するとそんな俺の元に、怪しげな二人の男が声を掛けてきた。
「よぉ坊っちゃん。こんな夜中に一人で何彷徨いてんだぁ？」
「ひひっ、もしかして迷子かぁ？だったらお兄さん達がここのルールを教えてやんねぇとなぁ」
　ヘラヘラと胡散臭い笑みを浮かべる彼らから、甘い酒の匂いが漂う。顔も赤いのを見たところ、ただ夜中にさ迷う子供を見付けて面白がっている酔っ払いのようだった。
「おっ、こいつよく見りゃ良さげな服着てんじゃねぇか！貴族の坊っちゃんなら金くれよ金～！」
　フードで素顔を隠していても、ぶかぶかのコートの下にある俺の服装は素人目で見ても高価なもの。それに目敏く気付いた男の一人は金を要求してくる。しかし俺は、
「……すみませんが、私は金品の交渉などとは無縁な生活を送っている故、普段から財布を持ち歩いておりません。ご期待に添えず誠に申し訳ありませんが、金銭の要求は他の方を当たって下さい」
　ペコリと礼儀正しくお辞儀し、丁寧な口調でやんわりと断る。
　普段は砕けた口調だが、これでも誇り高き皇帝陛下の息子。目上の者や大人に失礼な態度を取って周りに幻滅されれば一族の名が汚れる。故に俺はマナーはもちろん、礼儀作法も幼少期から完璧に教育され、こういった予期せぬ状況でも相手に無礼なく、怒らせないよう上手く対応出来ていた。
　だが子供にしては礼儀正し過ぎる俺の紳士的な振る舞いは、品の良さとは縁遠い彼らにとってはむしろ不気味に感じてしまっていたらしい。
「な、なんだこいつ、気色悪いな。どこの箱入り坊っちゃんだよ…？」
「いや、でもそんだけ良いとこのガキなら、財布が無くても金目のもんの一つや二つは身に付けてるだろ。おら、まずはその高そうな服脱げや！」
「うわっ!!?」

突然フードを引っ張られ、コートが奪われそうになる。だが俺をただの大人しい貴族の子供だと勘違いしていた男達は油断していた。
「こんのっ…！無理矢理人の物を盗もうだなんて、てめぇらもしや盗賊だな⁉めんどくせぇ敬語使って損したわ！この俺が成敗してやるっ!!」
「ああ⁉んだとてめ……ぶッ!!⁉」
引っ張り上げられて宙ぶらりんになりバタバタと暴れていただけだった筈の俺は振り子の原理で勢いを付け、後ろに居る男を容赦なく蹴り飛ばす。そして拘束から逃れ着地した直後。
「このガキ…ッ!!」
「ガキだからって、舐めんなッ!!」
「がはッ⁉」
小柄で身軽だからこそ出来る俊敏な動きでもう一人の男に近付き、その腹を思いっ切り力強く殴って二人目も難なく気絶させた。
「ふぅー……流石にこの展開は想定外だったけど、こいつらが弱くて助かったぜ」
焦った焦ったー、と呑気に言って安堵し、手の甲で額の汗を拭う。
日々勉学の合間にシュラとメズだけに限らず、大将軍のブドーや羅刹四鬼の三人からも武術を教わっていて本当に良かった。俺が皇族でも関係なく彼らが手加減無しで真剣にいつも向き合ってくれているおかげで、こうして大人相手でも並大抵の者なら負けない事も判明した。彼らには後日改めて感謝しなければ。
そこでふと、俺はすぐ側にあった路地の方へと視線を向ける。
「…？なんだあれ？」
暗くてよく見えないが、その奥に何かの物体が倒れていた。それが不思議と気になって、恐る恐るそれに近寄って正体を確かめようとする。
……そしてその時、俺は知ってしまった。千年の歴史を持つこの国に潜む、とてつもなく深い闇の存在を。
「…ッ!!⁉これって、まさか……人の、死体…!⁉」
そこにあったのは、死んでから既に何日か経過してるのか一部腐敗

した人間の死骸。生まれて初めて目にしたそれに、まだ幼い子供の俺は戦慄する。
何故？どうして？このこは争いのない平和な国の筈なのに。何故、こんな街中に死体があるのか。本で読んだ内容や人づてに聞いただけの知識以外は何も知らず、状況を理解出来ないままその場に佇み、ただただ困惑せざるを得なかった。
すると不意に別の人間の足音が聞こえ、この死体の人物を殺した犯人が来たのかもしれないと直感した俺は咄嗟に物陰に隠れた。
「あーあ、また死体が一つ増えちまった。いつの間にか結構溜まってるし、いい加減ここに隠してたやつ全部処理しねぇとなぁ～」
「おい、もう死んでるから雑に扱うのは良いが、もうちょっと奥に捨てろよ。そんな手前だと夜でも通行人に見られちまうじゃねぇか」
「おっと、悪ぃ悪ぃ」
声の主は二人組の男。ドサリと何か大きなモノを捨てた音が聞こえたかと思えば、今度はそれを乱暴に蹴り上げたような鈍い音が、静寂な夜の空間で嫌に響いた。
彼らの会話の内容からして、捨てられたのは新たな死体だと推測出来る。そしてあの腐敗した死骸も、恐らくあの二人が以前捨てたモノなのだろう。
子供の好奇心とは恐ろしいものだ。もしここで見付かったら、会話を聞いてしまった自分も殺されるかもしれない。ひたすらそんな恐怖に怯えながら必死に涙を堪え、両手で口を塞いで息を殺した。
「で、次の仕事なんだっけ？」
「もう忘れたのかよ？さっき隊長に頼まれたばっかだろ。ほら、あれだよあれ。最近俺ら警備隊に文句ばっか言って五月蝉ぇクソ真面目な文官のジジィに、死罪になりそうな適当な罪着せとけってやつ」
……えっ…？こいつ、今、なんて…？
信じられなかった。まさか、街の治安を守る警備隊が無実の人間に罪を着せようとしているだなんて。しかも、国に必要な文官の一人を……。
「ああ、あれか。でもいちいち罪状を考えて濡れ衣着せるのって正直

めんどくせぇよなぁ……。もっとこう、スパッ！と一般の奴らみてぇに罪の証拠がなくてもその場で処刑出来たら楽なのによぉ」
「大臣一派に属さねぇ良識派の人間は世間様に好かれてるからな、仕方ねぇよ。民の味方気取りしてるあいつらを何の理由もなく斬っちまったら俺らの立場がねぇ」
気怠げな男達の口振りで、この暗躍は今回に限ったものではないと気付く。彼ら警備隊は普段から無実の人間を何人も殺し、それを正義だと騙っていたのだ。
そんなバカな……。常に街の秩序を守るべき警備隊は、いつも裏でこんな事をやっているのか…？その場で処刑って…？大臣一派って…？もう何がなんだかわからない。一文字一文字彼らの会話に出てきた言葉を並べてぐるぐる思考を巡らせても脳が受け入れられず、頭の中が真っ白になってしまう。
やがて気付けば男達の気配はいつの間にか消えており、夜が明け始めた。宮殿に帰らねば。早くこの話を、父上達に知らせねば。
……けれど俺の話は、誰も聞きいてくれやしなかった。昔から大好きで尊敬している、最愛の両親すらも。
この街の警備隊に正義や秩序なんてない。数多くの実績のほとんどはでっちあげの罪によるもの。警備隊の者達は罪無き民達を無差別に殺しているのだという俺の主張は誰も信じないどころか真面目に聞いてくれもせず、何の意味も成さなかった。帝国で一番偉い身分の両親はただ、勝手に宮殿の外に出て夜の街を彷徨いていた俺をキツく叱り、罰として暫く自室から出るなと命じた。
なんで？なんで誰も俺の話をちっとも聞いてくれないの？些細な言い付けを守らず外に出た俺の事はちゃんと叱る癖に、絶対にやってはいけない非人道的な悪事を働いている彼らを罰しないのはなんでなの？あんた達は、無意味に殺された国民に何も思わないの？実際にその目で何も見てないからって、こんなの絶対に可笑しい。理不尽過ぎる。
その後一週間の間、俺は言われた通り部屋から一度も出ず、もう二度と宮殿の外には行かないと両親に約束した。

けれど諦めるつもりなどない。狭い空間に閉じ込められても、毎日勉強を強いられてきたこの部屋には分厚い本が大量にある。昔勧められた時は最初の数冊ですぐ飽きてしまったそれを俺は一から全て読み、この国の政治や社会についてを独学で学ぼうとした。部屋から出れるようになってからも、ずっと。

俺の訴えが子供の戯れ言だと笑われてしまうのなら、そう思えないような正確な知識を交えて間違いを指摘すれば良い。大人が反論出来ないくらいにもっと賢くなる為に、数少ない楽しみの鍛練や遊びの時間も捨てて毎日徹夜で猛勉強した。

遊び呆けていた天才が遂に真面目に勉強をし始めたという噂は他の皇族の間ですぐに広まった。このままでは後の皇位継承争いに我が子が勝てない、次の皇帝は俺で間違いないと焦る大人達が口を揃えて話しているのを時々耳にする。

そうだ、父上が隠居した後、俺が次の皇帝になれば良い。皇帝の息子として産まれたからには、必ず俺が次の皇帝になってやる。そしてこの国に隠された全ての闇を光に照らして、今度こそ犠牲のない平和な国に作り変えるんだ…!!

それが、俺の戦いが始まった序章。幼いながらに抱いたその大きな夢が、あまりにも強大過ぎる壁によって打ち砕かれる未来を知らずに目指し……地獄へと続く道に踏み込んでしまった、憐れな少年の物語。

衝突編

幻想と現実

あれから月日が流れ十代半ばになった頃。弱き者達の味方でありたい俺は、毎日顔を会わせる度に勃発する父上との口論が絶えなかった。

周りの目を盗んで帝都の下町や地方に関する資料をこっそり読んでみたり、貴族や家臣達の会話を盗み聞いていると不自然な点がいくつもあり、帝国の闇は警備隊だけの話ではないのがわかった。国による民への異常な金の搾取。下町や田舎の者達を拐って人権を奪い、暴力や殺害を楽しむ数多の愉快犯達の存在。こんな事、最高権力を持つ父上も知らないわけがない筈なのに……。俺の愛すべき帝国への疑念や不信感は、日に日に膨れ上がっていく一方だった。

真正面から抗議する俺の言葉を、父上はいつも聞き入れてはくれない。あれは間違ってる、これは間違ってると指摘しても、これが帝国の為だの一点張り。しかもその喧嘩のフレーズには、常にオネスト大臣の名前があった。

大臣がそうするべきだと言っていたから。大臣がこれが正しいと言っていたから。耳に胼胝が出来るくらい聞いてきたその名前を聞くのは、もう我慢ならなかった。

「大臣大臣大臣って……いつも大臣の意見を述べるだけで、父上は自らの頭で何も考えていないのですか!?その目で何も確かめず、ただただ彼の指示に従ってるだけでは意思の無い傀儡と同然！貴方が皇帝を名乗る資格も、その玉座に座る資格もないのではありませんか!?」

「資格？そんなもの、お前のような童が語るものではなかろう。それに、皇帝が他者に頼ってはいけないと誰が言った？人とは誰かと助け合って生きるものだ。博識な大臣に考えを任せて何が悪い」

このクソ親父、完全に開き直ってやがる。それらしい理屈を都合の良いように使って、大臣への依存は悪くないと主張してる。

「ラバックよ、適材適所という言葉を知っているか？身の安全を守る

為にここから出る事が許されぬ我の代わりに優秀な家臣が現状を見て考え、その結論を帝国の象徴である我が国民に告げる。それで多くの民が幸せでいるのだから良いではないか」
「それは金を持つ者だけです!!貧しい暮らしをしている下町や田舎の民達は常に必要以上の搾取をされ苦しみ、幼い子供や赤子の命さえも餓死や病で日々消えているのですよ!?弱き者を守るのが力を持つ我々の使命！なのに何故弱者を甚振り悪事を働く者達の冒涜を見過ごすのですか!?」
「平和な世界に犠牲は付き物だ。神でもない人間の我々が全てを守る事なんて出来やしないのだよ、ラバック。お前の歳ももう十半ばで大人に近付いているのだから、いい加減そのような子供騙しの幻想ばかりを見ず、目前の現実を見よ」
「違う!!現実を見ていないのは父上だ!!大臣の言葉を何一つ疑わず、全てを鵜呑みにしている!!あいつは善意に溢れた罪無き者達を、自分にとって邪魔者だという私的な理由で罪人に仕立て上げ、無慈悲に惨殺しているだけ！それを許さず正しく罰するのが、皇帝である貴方のお役目でしょう!?」
あいつは……オネストは化けの皮を被った反逆者だ。昔から俺達一家と家族のように接してとても優しかったあのオネストは、大臣になった自分の立場に酔いしれて変わってしまった。
今の彼は、家臣達から賄賂を受け取り、快楽に身を任せて堕落している。そしてその賄賂を見繕う為に、家臣達は更に民から金を搾り取り殺していく。帝国の悪政は、全てあの男が狂ったせいで始まったのだ。……なのに。
「…？何を言ってるのだ？大臣が邪魔だと思ったのなら、それで良いではないか」
「ッ!!?」
ああ、ダメだ。この人はもう、俺の尊敬していた父じゃない。まさかここまで大臣に洗脳され依存し堕落していただなんて、思ってもいなかった。この人も、既にオネストと同じように腐ってしまっている。その現実に、幻滅せざるを得なかった。

「――全く。またしても陛下と喧嘩なさっているとは、困ったものですなぁ、ラバック殿下。これが反抗期というやつですかね？」
「っ!!オネスト…!!」
俺達親子が対談していた謁見の間に許可なく入ってきた客人は諸悪の根源、オネスト。普段と変わらず肥えた腹をだらしなく揺らすそいつは、親子喧嘩真っ最中の俺らの間に割って入ってきた。
端から見ればただの喧嘩の仲裁。だがこれは、俺にさっさと帰れと促す合図でもある。
「殿下。陛下とのご対談中すみませんが、一旦席を外して頂いても宜しいでしょうか？私は少々、陛下と大事なお仕事のお話をしたいので」
「……わかりました。では、私はこれで失礼致します」
親の仇を見るような目でオネストを睨んでから、彼に促されるがまま素直に従って退室する。
これ以上あの人と話をしても意味がない。わかり合えないのだ、俺達親子は。同じ血が通ってるのに、なんでこんなにも意見が擦れ違ってしまうのだろうか。それも全部、オネストの仕業。あいつのせいで、帝国だけでなく俺達一家の関係も一気に崩れてしまった。もうあの幸せだった日々には戻らない。どう足掻いたって、時計の針は巻き戻せないんだ。
でもこのままで良いわけがない。この国を変えなきゃ。俺が新しい皇帝になって、間違いを正さなければ。
だが父上が隠居してくれるのは、恐らくまだまだ先だ。それまでずっと苦しむ人々は？皇帝の隠居を待っている間に、一体いどれ程の死人が出てしまうんだろうか？俺は彼らの苦しみを知ってるのに、何も出来ないからってそのまま見殺しにするのか？まだ子供で誰かに指示する権力もない俺が、どうやって彼らを救うんだ？
考えても考えても出てこない答え探しに、心が折れそうになる。――いっその事、父上が死んでくれれば……。
「ッ!!何を考えてんだ俺は…っ！それじゃああいつと同じじゃねぇか…!!」

自分のおぞましい考えにゾッとして、怒りの籠った拳を壁に打ち付ける。
肉親に死んで欲しいと願ってしまうだなんて、これではオネストのやってる事と一緒ではないか。俺はあいつとは違う、落ち着け、冷静になれ。俺は、愛する父の死を心から望んでなんかない。今は日頃のストレスで疲れてしまっているだけだ。
奴らと同じ闇に呑まれそうになった自分を叱咤し、不意に思ってしまった事を首を振って否定する。
「大丈夫…大丈夫……。俺ならまだ、頑張れる……頑張らなきゃ……。頑張れ、頑張れ俺……」
呪文のように呟いて、疲弊し切った自分に必死に言い聞かせた。まだ負けちゃいない。戦え、戦うんだ。例えこの身が血だらけになっても剣を握って、戦い続けろ。
俺の敵は、俺を子供扱いする大人ではない。真の敵は、快楽に溺れて腐ってしまった帝国そのもの。見て見ぬ振りをしてただ傍観するだけの父も同罪だ。
「……殿下」
「…？ああ、誰かと思ったらナジェンダさんでしたか。任務から帰ってきてたんですね、お疲れ様です。いつも大変な仕事を任せてすみません」
「いえ、ラバック殿下のお力になるのが我々の使命ですので。それが殿下の為になられたのなら本望です」
偶然通りすがりに鉢合わせたのはナジェンダ将軍。将校にしてはかなり若いが実力があり俺と似た志を持つ同志で、時折会っては仕事の時間を忘れて一緒にチェスやお茶会などをしながら他愛のない雑談をするくらいに仲の良い、俺の数少ない女性の友人である。
「……それより殿下。私如きが横から口を出すのはおこがましいでしょうが、お顔が優れておりません。今日はもうお休みになられた方が宜しいかと……」
「……お気遣いありがとうございます。でもご心配なく。俺は……私はまだ、疲れてなどいませんから」

一瞬つい気を緩めてしまったが、ここは謁見の間の前。なるべく私語は慎むべき場だ。
強がってナジェンダ将軍の気遣いを断った俺は、彼女の立っている方向とは真逆にある自室へと戻って行く。そんな俺の背中を、彼女が哀しげに見つめていたとは露知らず。
友人である彼女だけでなく、昔毎日のように稽古の指導をしてくれていた師のブドー大将軍を始めとした善良な家臣が俺を支持してくれてはいるが、一番信頼していた父や大臣に裏切られた俺にはもう誰も信じる事が出来ない。この宮殿内の者達全員が敵。
大切な弟や幼馴染みを巻き込まない為にも、味方なんて求めてはいけない。この茨の道を進むと決めたのなら、独りで巨大な敵と戦わなければならない。でもだからなんだ。例え世界を敵に回そうが俺の強い意思は決して揺るがない。やってやろうではないか、革命ってやつを…!!
まだ若く青二才な正義感を掲げる俺が求めるこの理想は所詮夢物語かもしれない。越えるべき壁は遥かに高いかもしれない。それでも、少しでも追い求めるものに近付く為に。例え誰にも理解されずに孤独であろうと、周りにバカにされようと努力し続けてみせる。
誰にも慕われないのなら、その実力を見せ付けて従わせろ。高い壁が越えられないのなら、その固い拳で壊わせ。夢物語だと嗤われるのなら、その賢い頭を使って現実にしてみせろ。それが出来ない奴に、国を統率する皇帝になる資格なんてない。正直自信はないが、出来る出来ないかの問題じゃない、やるしかないんだ。それ以外に、俺の突き進む道はない。
……その頃からとっくに壊れ始めていた俺はまだ知らない。本当の地獄は、これからだという事を。

家臣の陰謀

帝都の中心に建つ、広い塀に覆われた宮殿。昼とはまた違う……いや、昼どころか普段の夜とも違った不穏な静けさが漂う真夜中。その暗闇の中では、慌ただしく走る一人の少年の足音が廊下に響いていた。

「――父上ッ!!母上ッ!!」

少年が力強く開けたその扉の先。そこには、変わり果てた両親の姿があった。

「そん、な……間に合わなかった……」

赤く染まった両親の亡骸の側によろよろと近付く少年は、その血溜まりに膝を落とす。

かつて母だったそれの肌に触れてみるも、少年が長年愛してきた母の温もりは、もうそこには存在していなかった。その隣にある父だったそれも、母だったものと同じ。近頃は父とずっと意見が合わず喧嘩ばかりしていたが、それでも少年は父の事も愛していたのに。結局、父とは最期まで仲直りすら出来なかった。

しかし、両親の死に悲しむ少年が涙を流し始めたその時……。

「これはこれは……随分と大変な事態になりましたなぁ、殿下」

「ッ!!オネスト、貴様…っ!!!」

薄暗い部屋の奥に立っているのは、小太りした中年の男。

彼の気配に気付かなかった少年は、この国の大臣という立場を持つオネストを、憎しみを孕んだ目で睨み付ける。

「貴様が…貴様が父上と母上を……っ!!!」

「私が陛下と后妃を殺したとでも?嫌ですねぇ、どこにそんな証拠があるんです?」

「くっ…!!」

殿下と呼ばれる少年が前々から怪しい動きをしていた大臣が犯人だと訴えても、決定的な証拠が無い限り、その証言は意味を成さない。

けれど憎しみに囚われた少年の身体は、己の感情のままに動き出す。

「オネストオオオオッッ!!!!」
二つの死体の傍らに置かれてあった血濡れた剣。それを強く握り締めた少年の刃は、仇であるオネストへと向けられる。
だが、刃が肉に届くその寸前……。
「──兄、上……?」
「ッ!!?!」
小さな震え声に少年が動きを止めて振り向くと、そこには酷く怯えた様子の彼の弟が居た。
「兄上……一体、何をしておるのだ…?何故、大臣に剣を向けて……?大臣は、余達の家臣であろう…!?」
「ち、違うんだミカド!こいつは俺らをずっと騙して……!!」
「騙した?私が?殿下達を?酷い言い掛かりですなぁ、殿下。そう言う貴方こそ、ご両親を殺しただけに限らず、このままミカド様をも騙して消し去ろうとしていたのでしょう?」
「なっ!!?!」
長男である少年が自分の両親を殺したとでっち上げる大臣。彼は少年に濡れ衣を着せようとしていた。
「兄上が、父上と母上を……殺した…?兄上…それは本当、なのか…?」
「そんなわけないだろ!?あれは大臣が……!!」
「では殿下、貴方がその手に持っている剣はなんです?」
「ッ…!!!」
皇帝陛下と后妃の血に濡れた剣。それが何よりも動かぬ証拠だと嗤う大臣に、少年は絶望する。
填められた。全てがこの男の計画通りだったのだ。彼が行った反逆を、次期皇帝だと唱われている少年がその座欲しさにやったかのようにする為に。弟であるミカドに見せ付け、兄への信頼を奪い取る為に。
「そんな……父上、母上…!!」
大臣に促されるがまま両親の死体を見てしまったミカドは、先程の兄と同じようにそれへと駆け寄る。

「兄上っ！何故、何故このような酷い事を…っ!!」
「違う!!違うんだ!!俺を信じてくれ、ミカド!!」
「騙されてはなりませんよ、ミカド様。陛下達を殺したのは、貴方様の兄君……ラバック殿下なのですから」
　兄の悲痛な叫びは、もう唯一無二の家族となってしまった弟には届かない。
「嗚呼、憐れな殿下よ。あの無邪気だった幼き頃のようにずっと何も知らないままでいれば、このような悲劇にはならなかったものを……。両陛下の死は、無駄な悪足掻きをしていた貴方ご自身が招いたのですよ」
「…!!」
　憮然として立ち尽くす少年に近付き、弟には聞こえぬよう耳元で嘲笑いながら囁く大臣。そんな彼の卑劣な策に陥れられた少年……ラバックはそれをきっかけに、何かが壊れたかのように肩を震わせて笑い出した。
「ふ、ふふっ……はは…あはははははっ！そうか、そういう事だったのか…！大臣、お前は俺達を裏切ったんじゃない。最初から騙すつもりでずっとここに居たんだな！俺達を都合の良い操り人形にして、この国を支配する為に…!!」
　優しかった彼は変わってしまったのではない。本当は、最初から素性を隠して皇帝一家の側に居たのだ。だから当然、彼はラバックが抵抗せずともいつか両陛下の事を殺すつもりで……。
「そう、最初から……お前に面倒を見て貰っていた時点で俺達は負けていた！お前を家族のように想ってしまっていたせいで、俺達一家は何も疑わなかった！何もかも気付くのが遅過ぎた!!唯一抵抗していたこの俺でさえも、端っからお前の掌の上で転がされていたんだ!!」
　家族の命も信用も奪われて真実を知り、狂ったように笑い続けるラバック。だが一筋の涙を流すその瞳は虚ろで、もう光なんて映っていなかった。
　やがて騒ぎに気付いて駆け付けた近衛兵が、謁見の間の光景を見て絶句した。血溜まりに倒れた君主の亡骸の前で高笑いをする彼の姿

が、あまりにも狂気的で。
「嗚呼…父上、母上……この世で一番愛していた貴方達を、最期まで守れず申し訳ありませんでした……。せめて、どうか安らかにお眠り下さい……。私もいずれ、必ずこの忌々しい男を連れて、そちらへと向かいますので……!!」
絶望の淵へと落とされた少年は誓う。その深く根付いた強い憎悪と復讐心を糧にして、必ずオネストを地獄の底に引き摺り下ろしてみせると。それが、不幸な死を遂げた両親への手向けになると信じて。

こうして、権力も家族もなにもかも全てを失い、反逆者の手による濡れ衣で栄光の道から咎人へと転落した皇帝殿下、ラバックは、その日から陽の光を浴びる事はなくなった。

魔皇の誕生

近衛隊に取り抑えられた皇族、ラバックは皇帝殺しの罪人として地下の牢獄に入れられる。しかし無実の彼は抵抗しない。誰にも抗議すらせずただ大人しく従い、無言のまま埃まみれの冷たい監獄の中で何日も寝食を過ごして公開処刑が行われる日を待っていた。

皇帝が殺された際はあれだけ狂っていたのに、何故無抵抗なのかと見張りは不思議に思う。光のない目でどこか遠くを見つめて全く動かない今の彼には、昔の明るさもあの事件の瞬間の面影も一切ない。それがとにかく不気味で仕方がなかった。

そして空っぽの人形に成り果ててしまった彼は今日も、同じ血筋を持つ皇族からの暴力を無抵抗に受けていた。

「おらァッ!!いい加減黙ってねぇで何か喋ろよ優等生!俺らはてめぇのせいで散々周りからバカにされてきたんだぞ!どうせ勝てねぇ、てめぇ以外の皇族は凡才だってな!謝罪の言葉くらい吐けや!なぁ!?」

昔からラバックの才能に嫉妬し、逆恨みしていたその青年は横たわる彼の胸ぐらを掴んで顔や胴体を容赦なく殴り続ける。

「それともなんだ?お前の大事な弟を甚振れば少しは反省するか?あのガキもお前に似て綺麗な顔してるもんなぁ。そこらの変態にでも頼んでたっぷり可愛がって貰おうじゃねぇか!」

「……せぇ」

「あ?」

愛する弟を使って脅すと、血を吐いてむせるラバックが数日振りに表情を変え、口を開いた。だが勝者から敗者となった彼の懺悔の言葉を待っていた青年の期待は、すぐに裏切られた。

「……五月蝉ぇ。下らねぇプライド傷付けられたからって、キャンキャン吠えてんじゃねぇよ、負け犬が。俺に手錠が無いと勝てねぇような雑魚に、俺は興味ねぇんだよ」

「ッ!!てんめぇ…っ!!」

今の不利な状況に関わらずまるで見下してるようなラバックの挑発に激昂した青年はその顔を更に強く殴る。しかしそれでもラバッ

クは嘲笑って再び煽り言葉を放つ。
「く、ははっ…！無抵抗な奴に勝てて嬉しいか？良かったなぁ、負け犬。これでみんなに知って貰えるぜ？お前はやっぱり実力じゃあ俺に敵わなかったってな」
「黙れッ!!!その手錠が無くたって落ちぶれたてめぇになんざ勝てるに決まってんだろうが!!」
プライドを深く傷付けられた青年は怒りのままにラバックを床に放り投げ、一旦柵の外に出て手錠の鍵を探す。そして見付け出したその鍵で、彼の手錠を外した。
「ほら、これでハンデ無しだ！掛かってきやがれ！俺はてめぇなんかに負けな……ぐッ…!?」
正々堂々と戦うつもりでいた青年の腹に、突然強い衝撃が当てられる。
「ありがとな、負け犬。おかげでやっと外に出れるぜ」
そう、安い挑発にまんまと乗ってしまった彼はラバックの思惑通りに動かされ、利用されていたのだ。それも全て、この監獄から抜け出す為。
「いやぁ、本当にあんな安い挑発に乗っちゃうなんて流石だね、あんた。これ正直あのクソ野郎とやり口が似てるからやだったんだけど、使えそうな奴はちゃんと使っておかないとマジでキツかったからねぇ。上手くいって良かった良かった」
床に崩れ落ちた青年を他所に、よっこらせ、と年寄り臭く言って重たい身体を起こしたラバックが愉快そうに笑う。だが相変わらず目が笑っていない。
「て、めぇ……！まさか、最初から俺を利用するつもりで…!?」
「当たり前じゃん。でもさっき言ったやつはちゃんと全部俺の本音だよ。まぁそんな事よりさ……あんた、俺の為に死んでくんない？」
「はっ…？」
返事も待たずに、ラバックは青年の腰に下げられていた護身用のナイフを手に取って持ち主に突き刺す。
赤い色の雫が、刃を伝ってポタポタと床に落ちていく。青年は一瞬

わからなかった。自分の身に、一体何が起きたのか。
「毎日毎日殴られてた恨みか、って思うでしょ？でも残念ながらそれだけじゃなんだよなぁ、これが。……俺、知ってんだ。あんたが帝都で捕まえてきた女を甚振り殺して遊んでるの」
「…ッ!!」
くすりと冷たく微笑んだラバックに、青年は酷く戦慄する。罪とわかってやってきた自分の所業が、正義を語る彼に暴かれていたのを知って。そして今、自分が死ぬと悟って。
狂ってる。なんの躊躇もなく人を刺したこいつの正義は、やっぱり歪んでる。
「悪いな。陽の下に戻れなくなった今、俺にはもうこうするしかお前ら悪人を裁く方法がないんだ。目には目を、歯には歯を……悪には悪を、ってな」
刺した犯人は自嘲気味に嗤った。しかしその頃には既に痙攣していた青年の身体は動かなくなり、彼の命はそこで途絶えてしまう。
目の前の男の死を確認したラバックは静かにナイフを抜く。だが肉を抉る音と感触がその脳に刻まれたというのに、彼の表情は酷薄な笑顔のままだった。
「……初めての人殺しが身内なら、ちったぁ正気に戻れるかなって思ったのになぁ。むしろスカッとしてて全然哀しくないや。……やっぱり俺も、もう壊れちまってんだな。ほんと、自分で自分に嫌気が差すよ」
昔から関係が悪かった悪人であれど、彼も血の繋がりのある縁者だったのに。彼の死に哀しみを一切感じられない。そこから溢れ出てくる赤い血液が美しく見え、魅入られてしまう。自分も人の道から外れてしまっていたと自覚したラバックは、己の愚かさを心底呪う。
「…？何か音がしましたが、どうかされ……ま、ッ、!!？」
不自然な物音に気付いた監守が彼らの居た牢屋に近付いた瞬間、ラバックが鎧と鎧の隙間にナイフを器用に振るい、喉を斬った。
一瞬だった。その見張りが自分の死を認知する間もなかった程に。
「ん……。そこそこブランクが長かったけど、案外身体はちゃんと覚

えてるもんだな。ま、昔あれだけ師匠達に散々容赦なくボコられてただけはあるか」
久々の運動にも関わらず、その身体は師に叩き込まれた技術を全てしっかりと覚えていた。肩を回して解しながらそれを実感した彼は、その監守が所持していた剣を拾って武器をナイフと入れ換える。
「やっぱこっちの方がしっくりくるし使い易そうだな。念の為ナイフは予備にしておこう」
ナイフを予備の暗器として懐に隠した彼は二つの死体を放置したまま監獄を出て、鼻歌混じりに歩いて宮殿の外を目指す。
「〜♪」
やがて彼が通った道には死屍累累と数多くの亡骸が転がり、それはまるで王の歩く美しい絨毯のように真っ赤な血で染まっていた。故に彼は後にこう呼ばれた。実の親である両陛下を惨殺し、帝国史上最悪の殺戮事件を起こした正義狂いの大罪人――『鮮血の魔皇(まおう)』と。

夢から野望へ

暗く淀んだ曇り空の下。大量の返り血を浴びた魔皇の目指す敷地の外はもう目前。けれどそんな彼の前に立ち開かる者が居た。それは、魔皇と呼ばれる少年の師。宮殿の守護者、大将軍のブドーだ。

「……殿下。何故このような事をなさっているのですか？これ以上の宮殿内での殺戮は、いくら貴方様でも……」

「殺す、ってか？じゃあさっさとそうしてくれよ。弟子想いなあんたが、昔から可愛がってた俺を殺せるっていうならな」

「……」

その先を代弁した魔皇が、ブドーの良心を抉るような皮肉を述べる。それに対してブドーは言葉を詰まらせ、押し黙ってしまう。

「俺を殺してくれないなら早くどいてくれよ、師匠。こちとらあんたにはまだ勝てねぇってわかってるから、今ここで戦いたくはねぇ。でもそっちが殺り合うっていうなら、俺もそれ相応の覚悟であんたを殺しに行く」

敵の増援が向かってくる。だがそれに焦る事もなく、魔皇はかつての師に確かな殺気を放つ。

「……一つ、お聞きしても宜しいでしょうか？貴方が目指すその先には、一体何があるのですか？」

「……さぁな。これが果たして民の救済に繋がっているのか、或いは世界の破滅に繋がっているのかは全知の神でもない限り誰にもわからんよ。だが俺は俺の夢を……野望を叶える為にここに居る。あんな狭い場所で無様に野垂れ死ぬくらいなら、俺は破滅の道であろうとこの先を突き進む。愚かな罪人としてな」

質問に答えた魔皇の目には、決して揺るがぬ覚悟と憎しみの炎が宿っていた。その迷いのない瞳を見たブドーは、再び口を閉ざす。

「……もう一度言う。そこをどけ、ブドー。これは命令だ」

お前に頼むのはこれで最後だ。遠回しにそう告げたかつての主に、暫く悩んでいたブドーは遂に道を開ける。

「……もしもいつか貴方様と再びお会い出来たとしたら。その時貴方

が……いや、貴様が破滅の道を歩んでいたのであれば……私は、今度こそ貴様を止める」
「ああ、望むところだ。それでこそ帝国自慢の守護者だ。そん時がきたら俺も、全力であんたという壁を壊してみせる。……それまで死ぬなよ？師匠」
「それはこちらの台詞だ、愚か者」
　別れの言葉なんていらない。二人はいずれ、必ず再会するのだから。それが例え主従や師弟ではなく、壊す者と護る者という関係であっても。
　強大な壁を通り過ぎ、漸く辿り着いた塀の外。もう二度と外には出ないと昔交わした両親との約束を、こんな形で破ってしまった。
　雨雲に包まれた空を仰いで、「ごめん」と独り寂しげに呟く魔皇。しかしそこで、また新たな壁に立ち塞がられる。
「よぉ、久しぶりだな。随分見ねぇ間にまた酷ぇ顔になっちまって……。らしくねぇなぁ、次期皇帝サマ？」
「……今度はお前らかよ。帝位を失くして夢が果たせなくなった幼馴染みを笑いに来たんだったらお断りするぜ？」
　大将軍の次に現れたのは、兄弟同然の幼馴染み二人。頼れる兄と姉だったシュラとメズだ。けれど魔皇はそんな彼らすらも邪魔をするのなら、自分の私情共々その存在を消すつもりでいた。
　しかし彼が勉学に励むようになって以降会う機会が減ったシュラとメズは、かつての姿を失った友に意外な言葉を掛ける。
「ラバの癖になーに格好付けてんだよ。そんな面白そうな遊びに、アタシらを誘わないのは水臭いんじゃねぇの？」
「そうそう、俺らはお前の兄弟みてぇなもんだってのになぁ。抜け駆けは許さねぇぞ」
「……は？」
　魔皇には、彼らの言っている言葉の意味がわからなかった。思わず面食らい、ポカンとした顔で目をパチクリと瞬かせる。
「えっと…？お前ら、何言ってんの？俺が今何やってんのかわかってるのか？」

「そんなん知ってるよ。これが俺の革命だぁー!!って叫んで帝国に反旗を翻そうとしてんだろ?アタシらもそれに参加するって話!」
「いや大体そうだけど叫んではないからな!?つかなんでそんな軽いノリで付いて来ようとしてんのお前ら!?絶対自分達の言ってる意味わかってないよな!?俺と同じ反逆者になって帝国を敵に回すんだぞ!?」
「それがどうした?むしろあの親父の敵になれるなんてすげぇじゃねぇか。お荷物扱いすんなよ、俺らはお前の味方なんだからさ」
「…!!」
　帝国を敵に回した自分の味方だと言われた魔皇は戸惑った。そして漸く知った。ずっと独りだと思い込んでいた自分には、まだ仲間が居たのだと。
「本当に……本気で言ってるのか…?俺、もう壊れちゃったのに……そんな俺でも、まだ、味方でいてくれるの…?」
「ああ、そうだ。お前がぶっ壊れていようがいなかろうが、お前が俺らの弟なのは変わらねぇ。……お前はお前なんだよ、ラバック」
　震えた声で聞いた魔皇の質問に、兄のように慕っていたシュラが肯定する。その隣に居るメズも、当然のように頷き魔皇となった彼を受け入れてくれていた。
　昔から、この世に二人しかいない対等な存在。そんな兄と姉の言葉に魔皇は……いいや、ラバックは。
「うっ、ぐすっ……二人共、ごめ…っ、俺っ、ずっと…独りだと、思って……っ!」
「あーはいはい、わぁーってるって。んなもん気にしなくて良いから泣くな。さっきまでの威勢はどこ行ったんだよ?」
　ずっと蓋をして押し込んできた感情を解き放つように、ポロポロと涙を流し始めた。すると昔泣き虫だったラバックの面倒をよく見ていたシュラは慣れた様子であやす。
　いくら殺戮を繰り返そうと、彼も人の子。普通の子供らしく泣く事だってあるのだ。それを教えてくれたのも、この二人の幼馴染みだった。
「あーっ!!シュラ兄がラバを泣かせたー!!」

「ああ!?お前も同調してただろうが!!俺だけのせいにすんな!!」
メズにわざとらしく指を指されたシュラが大声で怒鳴るが、彼女は相変わらず彼を無視し、ラバックを抱き寄せる。
「よぉ～ちよちよち～、ラバックちゃんは相変わらず泣き虫でちゅね～?お姉ちゃんが慰めてあげまちゅよ～」
「……殺すぞ」
赤ちゃん言葉でバカにされたラバックはされるがままに抱き締められるも嗚咽しながら若干の殺意を露にする。でもその脅しは彼女には全く効かなかった。
「おい、いい加減じゃれ合ってねぇでさっさとずらからねぇか?流石にそろそろ追手が来ちまうぞ」
宮殿の敷地外に出ようと、ここはまだ敵地である帝都。ラバックを追ってきた近衛兵達が押し寄せてくる。
「うわぁ～、あんなに近衛兵が外に出てるの初めて見た～!ラバ、こっから逃げる算段とかあんの?」
「……ない」
「マジかよお前」
無作で騒ぎを起こしたラバックに二人は引く程呆れる。だが仕方ないだろう、ずっと監獄に閉じ込められていた彼に小細工を仕掛ける時間などなかったのだから。
「しゃーねぇな。ほんとはまだああいう雑魚共にお披露目する気はなかったんだが……使ってやるか」
ここは自分の出番だと名乗り出たシュラが、ポケットから何かを取り出す。
そしてそれを構えた瞬間。三人の足元に不思議な円が浮かび上がり、そこから放たれる光に呑まれた彼らは一瞬でその場から姿を消した。
突如大罪人と裏切り者の姿が消えて狼狽える兵達。だがブドーは動じないまま、三人が居た場所を遠くから見つめる。するとそこに、魔皇誕生のきっかけを作った諸悪の根源が。
「こんなところで何をしてるんです?ブドー大将軍」

「オネストか。……私はただ、この狭い鳥籠から巣立って行った雛鳥を見送っただけだ」
　罪人を見過ごした彼を責めるように聞いたオネストに、ブドーは淡々と答えた。昔から外の世界に憧れていた愛弟子が旅立った姿に、複雑な想いを抱きながら。
「ふふっ、雛鳥ですか。貴方はあの大罪人を随分可愛らしく例えているようですねぇ」
「その大罪人に仕立て上げたのはどうせ貴様の仕業だろう？あの方は本来、とても慈悲深いお方なのだ。貴様のような狡猾な悪党に陥れられなければ、将来立派な陛下になられていた筈だ」
　両者の間が不穏な空気に包まれる。けれどそれはたった数秒の出来事。この場に用がなくなったブドーは無言で踵を返し立ち去った。
「……やれやれ。完全に心を折ってやったつもりが、まさかこうなるとは予想外でしたよ、殿下。ですが貴方が後どのくらいまで抗えるのか、今後は楽しみにしていますよ」
　黒幕のオネストは心底愉快そうに嗤う。まるで舞台の上で踊らされているピエロを見るように。
　恐らくラバックや羅刹四鬼のメズ、そして自分の息子は革命軍に入るのだろうと予測される。そんな彼らがこの帝国にどう立ち向かうのか、遥か遠くの玉座から眺めているだけのオネストは楽しみで仕方がなかった。

始動編
宣戦布告

――数年後、帝歴１０２４年。帝都近郊の街道に、とある一つの馬車が走っていた。
その馬車に乗っているのは、引退後隠居生活を送っていた帝国の元大臣チョウリとその娘、スピア。だが国を憂いて毒蛇の巣（帝都）を目指していた彼らは、予期せぬ刺客に襲撃された。
「また盗賊か!?治安の乱れにも程がある！」
彼らの前に立ち塞がる三人の男は盗賊……否、彼らは帝国の軍人。エスデス軍の幹部である三獣士だ。
「……ダイダラ」
「おう」
指揮官と思われる老紳士、リヴァの指示に従って前に出た特攻隊長の巨漢、ダイダラ。彼は背負っていた斧の帝具、二挺大斧『ベルヴァーク』を掲げたかと思えば、親子と護衛十数人以上に向かって薙ぎ払おうとする。
が、しかし。周囲に放たれたベルヴァークの斬撃は何者かに防がれた。
「ッ!!?今俺の攻撃を防いだのは誰だ!?何も見えなかったぞ!?」
「よぉ帝国軍。あんたらの依頼人は誰だい？……って、聞かなくてもわかるか」
突然の出来事に狼狽えたダイダラ達の目の前に、仮面で顔を隠した黒ずくめのマント姿の少年一人が忽然として現れる。
どこから出てきたのかわからない少年は口角を上げて両手を複雑に動かす。するとそこから何やら光に反射するものが見えた。
「糸…？帝具使いか！」
「って事はてめぇがナイトイドか！漸く会えて嬉しいぜ！」
「ナイトレイド？……ああ、それって確か最近帝都で騒いでるって噂の暗殺者集団さんだっけ？悪いけど俺らは関係ないよ」

悪徳商人や残虐な役人を狙って近頃帝都を脅かしている帝具使いの暗殺者集団、ナイトレイド。その実は反乱軍の暗部である。だが糸を操る帝具を扱う少年は三獣士が待ち伏せていたその標的ではなかった。

「えぇーっ!!?ナイトレイドじゃないの!?じゃあ誰なのお前!?僕らのお仕事の邪魔しないでよ!」

やっと真の標的と戦えると思っていたのに、と残念がる子供のような容姿の軍人、ニャウが苛々した様子で邪魔者の正体を問う。

「誰って……俺らはただの通りすがりの魔皇軍さっ!」

語尾と同時に鋭く頑丈な糸を放つ少年。それを見て咄嗟に斧を二挺に分けたダイダラは苦戦しながらも向かってくる糸を次々に弾いていく。

「くっ…!魔王軍だぁ?聞いた事のねぇ組織だな」

「あら残念。ま、軍っつってもたった数人しか居ねぇけどな。でも帝国の奴なら俺自身の名前は知ってる筈だぜ。『鮮血の魔皇』、ってな」

「!!魔皇だと…!?貴様、まさか……!」

流れ弾の糸を手刀で防いでいたリヴァが最後まで言葉を口にする直前。背後に居た何者かが拳で彼を貫く。

「がふッ…!まだ、一人……潜んでいたの、か…!?」

「敵は一人だと思ったか?残念だったな、おっさん。今ここに居る俺らはてめぇらと同じ三人だ」

さっきまで気配がなかったのに、一体どこから…?そう疑問に思った彼らは知る由もない。魔皇と似た格好をしたその第三者が、帝具を使って瞬間移動していた事を。

「リヴァ!!?貴様よくも…っ!!」

「あっはは!そうやって怒ってる時程油断してる奴ってそうそう居ねぇよな〜!」

リーダーが殺られて激怒するニャウが縦笛の帝具を構えようとするが、後ろから、今度は無邪気に笑う少女の声が。

本能的に命の危機を察知した彼は少女の攻撃を間一髪で回避し、体制を整えるべく後退していく。

「チッ！最後の一人か……！ダイダラ！敵の二人は格闘家だ！相性的にお互いの対象を変え……」
「無駄だよ」
「えっ…？」
　冷酷に嗤った魔皇が、ニャウの首に糸を巻く。そして、
「う、ガッ…!?ア〝、ッ〝…！」
　ギリギリと引かれる糸が軋み、標的の喉に深く食い込む。そのまま息が出来なくなったニャウは宙に吊るされ、窒息死してしまった。
「ッ!!（こいつら、二分もせずにリヴァとニャウを…!?）」
　最強の上司も認める実力の持ち主が短時間で二人も倒された。親しい仲間だった彼らの仇を見たダイダラは、復讐心よりも先に恐怖心が芽生える。
　一人でこいつらには絶対に勝てない、殺される。自分達は狩る側ではなく狩られる側だった。彼らこそが捕食者だ。戦闘狂と自負している彼でさえも、そう確信して死に怯えてしまう。それ程、その三人の脅威は恐ろしいものだった。
「た、助けっ…！」
「今更命乞いは聞かねぇぜ、エスデス軍。こちとらてめぇらの働いてきた悪事は既に把握済みなんだよ。言い訳なら地獄の閻魔様に言いな!!」
「ぐあ〝ァ〝ッ!!」
　糸を束ねて出来た槍が、ダイダラの腹に突き刺さる。そしてその体内で一本一本に解けた槍の糸は全て心臓に向かい、冷徹に。無慈悲にそれを砕いた。
「三獣士……。あのエスデス軍の中でも特に強いって噂だったけど、シュラ兄のシャンバラ使って奇襲仕掛けちまえばこの程度か。つまんねぇな」
「つーかラバ、なんでアタシの獲物まで狩っちゃったの!?アタシだけ誰も殺れてねぇじゃん!!アタシも一人くらいは殺りたかったのにぃーーっ!!」
「あー、悪ぃ悪ぃメズ姉。だってあのチビ、俺とは相性良いから勝てる

みてぇな事言おうとしたからさぁ…ちょっとムカついちまった。
……それより」
　返り血一つ浴びずに三獣士の処刑を終えた魔皇が、不貞腐れる仲間の少女メズを軽くあしらってからスピアに振り向き近付く。いつの間にか腰が引けて座り込んでいたスピアはそんな彼に一瞬肩を揺らしたが、
「……お怪我はありませんか？お嬢さん」
　視線を合わせようと目の前で屈み、仮面を外した魔皇の素顔。それは緑の髪と瞳が特徴的な美形の少年だった。その柔らかい微笑みに、命を救われた彼女は不覚にもドキリとしてしまう。
「は、はい。おかげ様でなんとか……。た、助けて下さってありがとうございます…！貴方達にはなんとお礼をしたら…！」
「礼などいりませんよ。今回はこちらが勝手に関与しただけですので。まぁ、強いて言うのであれば……礼とは少し違う気がしますが、お二人方には未来の帝国を支え続けて欲しい、ですかね」
　謙虚に礼を断った代わりに、民の為に戦おうとしている親子を応援する魔皇。先程の恐ろしさとは打って変わって優しいその態度は、まるで別人のように見えた。
　だが年頃の乙女のスピアからすると彼はまさにピンチを救ってくれた格好いい王子様のようなもの。彼が魔皇などとおぞましい異名で敵に呼ばれていた事なんてすっかり忘れて惚けてしまっている。
「貴方はもしや、ラバック殿下…!?やはりまだ生きておられたんですね…！」
「……お久しぶりです、チョウリさん。昔から尊敬している貴方とまたこうしてお逢い出来て光栄です」
　魔皇の素顔を見たチョウリが感激した様子で自ら彼の元へ向かう。その会話を聞いて、スピアもハッと我に返った。
「ラバック殿下って……あのラバック様ですか!?」
「様…？ああ、はい、ラバックは俺ですけど……なんでそんな嬉しそうなんです？俺を知ってるという事は、数年前の事件もご存じなのでは…？」

意外な反応をされて少し戸惑う魔皇ことラバック。彼のもう一人の仲間、シュラも若干引き気味である。しかし彼女は遠慮なくぐいぐいと詰め寄っていく。
「もちろん存じております！ですが私は父上のお慕いする理想家のラバック様が悪事に手を染めてなどいないと信じて……」
「……いいえ。信じて貰ってるのに申し訳ありませんが、俺はあの時、大きな罪を犯しました。理想はまだ追い求めていても、今もやっている事は悪と全く変わりません」
真っ直ぐな目で信じてると言ってくれたスピアからの信頼を、ラバックはバッサリと切り捨てる。その返事を聞いて、純粋な彼女はショックを受けてしまう。しかし、
「ですが、正義と悪とは紙一重。誰かが正義を振るえば、悪が傷付く。果たしてそれは本物の正義でしょうか？否、正義というものは悪なんですよ。つまり、悪だけが悪を裁ける。悪を傷付け悪を貫き通す事こそが、俺の正義であり信念。それが弱き民への救いに繋がるのであれば、俺は魔皇（魔王）らしく喜んで世界の敵となります」
「!!?世界の敵、ですと…!?」
クスリと不敵に微笑むラバックが語る信念は、チョウリの知る昔の彼とは全く違う。噂に聞いた通り、本当に変わり果ててしまっていた。ドス黒い何かを感じさせるその不気味な笑顔に、彼を慕っていたチョウリもスピアも身震いする。
「……ふふっ。そんなに怯えなくても大丈夫ですよ。愛しき民を想う貴方達には将来平和になったこの国を任せたいですからね、危害を加えるつもりはありません。……まぁ、俺達の邪魔をしなければ、ですけど」
「なっ…!?」
歪んだ正義に囚われた魔皇からの脅し。余計な事はするなと親子に威嚇する彼を幼馴染みの二人は諌めようともせず、興味なさげに見守るだけ。
二人はただ、彼と共に過ごす時間が退屈しないから。様々な苦楽を共有したいから、彼に付いているだけ。それ以外に、この愚かで愛し

い弟と一緒に居たい理由などない。
「そんなバカな…!貴方は、反乱軍に所属しているのではないのですか…!?我々のような反帝国派の人間に危害を加えるのは、将来我らを必要としてくれている反乱軍すらも敵に回すという事ですよ!?」
「はて、俺達が反乱軍に属しているといつ言いました？我々は反乱軍になんて組していませんよ。皇族だった俺が巨大な組織に入れば大きな存在として良いように持ち上げられ、自由に身動きも取れずにあの傀儡共と同じように利用される末路を辿るだけ。……俺は、愚かな父や弟とは違う」
「っ!!」
ここには居ない家族に対する軽蔑の目。誰よりも思慮深く聡明な魔皇は、反乱軍に属していなかった。事件後何度もスカウトされてきたが全て応さずに追い返している。
だが異国に旅立つ前。地方の小規模基地に立ち寄った際に彼は、皇帝一族だからこそ知る宮殿内の貴重な情報を交換材料にして現在所持している帝具、千変万化『クローステール』を受け取っていた。だから反乱軍とは完全に敵対したいわけではない。
「彼らには帝具の件などでお世話になりましたし、来たるべき決戦の日には師匠……ブドーやエスデスの足止めをして頂きたいので、なるべく協力関係でいたいんですけどね。今回は帝国への挨拶代わりも兼ねて反乱軍に一つ借りを作ってやりましたが……これは警告です」
反乱軍はあくまで敵の戦力削りに使える駒の一つにしか過ぎない。民に寄り添う巨大組織すらも利用しようとする魔皇は憎しみの殺意を表す。
「あいつは……オネストは俺達魔皇軍、『ワイルドハント』の獲物だ。反乱軍や他の奴らからの横取りは絶対に許さない。帝国側の皆さんに、そうお伝えして下さいね。帝都で俺達の存在が認知されれば、反乱軍の耳にもいずれ届くでしょうから」

逸れ者達との出逢いと発足

――かの有名な帝国から南東の諸島。そこには一つの島を拠点にしたとある海賊団が居た。

この世は弱肉強食。人生は一度きり。ならば生きてる内にやりたい事だけをひたすらやっていきたい。暴虐非道、酒地肉林。それが俺（エンシン）達海賊のモットーだった。

しかしある日そのアジトは目の前で炎に呑まれ、潰されてしまった。それも、たったの三人相手に。

「なんなんだ……なんなんだよてめぇらは!!?一体何が目的だ!?金か!?宝か!?」

「いらねぇよ、そんなガラクタ。俺らが今欲しいのは力だ。強い戦力が欲しいんだ」

燃え広がる炎の中、三人のリーダーらしき少年が俺に手を差し伸べる。

「船長、あんたは曲刀使いだと噂で聞いた。だからアレを使えるかと思ってスカウトしに来たんだ、俺らの仲間にならねぇか、ってね。この要求を呑んでくれたら、あんたと今生きてる奴らの命は助けてやるよ」

それはつまり、断れば殺すという事。俺はまだ死にたくねぇ、死ぬまでにやりたい事がまだたくさんあるんだ。そう叫んだら、そいつはこう言った。

「ならエンシン、そのやりたい事リストにもう一つ新しい夢を加えてみねぇか?」

「新しい、夢…?」

「そう。それは俺らの野望……帝国を潰す事だ」

不敵に微笑むそいつは、ただのガキじゃなかった。俺のちっぽけなアジトどころかうちの国とは比べものにならない程デカい国を潰そうとしている、とち狂った魔皇だ。

だが、面白ぇ。最っ高にクレイジーでイカレてやがる。その淀んだ目が見据える破滅の未来を見てみたい。国自体を壊すなんて誰も想

像した事がないであろうそいつの野望に、俺はとても興味を惹かれた。
良いだろう、仲間になってやる。それが、俺と大将達との出逢いだ。

――錬金術。それは摩訶不思議な力を以てして行える奇跡のような魅技。
だが錬金術を使うには知識と、その生成したいものと同等の価値の材料が必要じゃ。妾（ドロテア）が欲するは己の美しさ……即ち若さじゃ。
己の欲望の為だけに長年研究に研究を重ね自身の肉体を改造してきた。その結果わかった方法が、他者から奪う生命力。そしてそれを集めに数々の街を潰しながら旅をしていた途中で、偶然帝具を手に入れたんじゃが……。
「やぁお嬢さん、なかなか面白い帝具を持ってるね」
幸か不幸な事か、彼奴らに出逢ってしまった。
「帝具を知っておるのか。この国の者にしては珍しいのぅ……。貴様ら、何奴じゃ？」
「残念だけど俺らはこの国の人間じゃない。帝国って知ってる？お嬢さんが持ってるその帝具を作ったっていう大国。俺らはそこ出身なんだ」
「ほう、帝国か。ならば貴様ら、妾からこのアブソデックを奪おうという事か？悪いがそのような頼みを聞く気はないぞ」
「大事な帝具をそう易々と渡してくれるなんて思ってないんでご心配なく。交渉が無理なら無理矢理奪うのみだからね」
笑って敵意を露にする其奴は他の者達を後ろに下げ、妾と一対一で戦おうとした。
バカめ、子供のような容姿だからと妾を舐めよっとる。妾の錬金術とこのアブソデックの恐ろしさ、魅せてやろうぞ。
……そう思っておったのに。彼奴に噛み付いたら、妾はその血の美味さに魅力されてしまった。今までに飲んだ事のない、熱く濃厚で煮え滾った高貴な血の味に。

「俺の血がもっと欲しい？綺麗とかならわかるけど、あんな鉄臭ぇのが美味いとは到底思えねぇな……。まぁ良いや、なんなら契約しようぜ、ドロテア。定期的に俺の血をやる代わりに、あんたは俺の仲間になって俺の為に命を賭けて戦う。それがあんたら錬金術師の言う等価交換ってやつだろ？」

妾は迷わず頷いた。その血を永遠に飲む為に、此奴に……魔皇に付いて行くと決断して。

その後彼奴は言った、帝具の研究をしてみないかと。あれは錬金術とはまた違う未知の領域。それを解析していけば、妾の望みも手に入れられるのではないかと提案してきたのじゃ。おかげでその旅先での妾の研究は一気に大進歩し万々歳じゃった。そして妾の夢は新たに二つ増えた。

一つは帝具を越える兵器の開発。もう一つは、永遠に血を貰う為に、この魔皇も妾の望む不老不死の身体にしてやる事。若き魔皇はそれを望まぬと言っておったが、本人の気持ちなぞどうでも良い。妾が魔皇を欲しているから。魔皇の血を自分だけのものにしたいから望んでいるのじゃ。

それが、妾が彼奴らと共に居る一番の理由じゃ。

――家族を失った時、彼らは現れた。燃え盛る炎に包まれた家の前で絶望していた私（コスミナ）に、彼は救いの手を差し伸ばしてくれた。

「あんたが悲しむその気持ち、よくわかるよ。俺も大切な家族をみんな奪われた。この世は不公平だよな。俺らの国も、理不尽な理由で殺される人達が多いんだ」

私に共感していた彼はどこか寂しげで。でも憎みの目をしていて、私と同じだと思った。

「あんたの復讐、手伝ってやろうか？」

不敵な笑みで、彼は私に不思議なマイクを渡した。この怒りと憎しみの歌を、私の全てを奪った仇にぶつけられるように。私に、戦う力を与えてくれました。

邪魔をする者達は全て彼とその仲間が排除し、前へと進めた私は仇を討てた。もう無理だと思っていたのに。全部諦めていたのに。魔皇と名乗る彼は、私に最後のチャンスをくれたんです。
感謝してもし切れない。貴方達に恩返しをしたいって言ったら、
「じゃあ仲間になってくれよ。その力を持ったあんたなら、俺ら魔皇軍の仲間に相応しい。だから付いて来い、コスミナ」
それが、私のご主人様からの初めてのご命令でした。

――汚れのない子供が大好きな俺（チャンプ）は、幼い子供を見掛けては癒して貰い、その後大人にならないようにと殺してあげるのが使命だった。
なのに当時の俺は地元で指名手配され、毎日警察に追われる日々に怯えていた。そんな時だった、あの黒い天使と出逢ったのは。
「シリアルキラーのチャンプってあんただろ？町の指名手配に載ってたから、帝具の回収ついでに賞金稼ぎとして捕まえさせて貰うぜ」
月明かりに照らされた美しい少年。でもその緑の瞳には輝きがなく、どこまでも深い暗闇の色をしていた。美しい。一体どんな体験すれば、こんなにも綺麗な瞳をするのだろうか。そして聞いてみた。君は本物の天使なのか？って。
「天使？いいや、俺は魔皇だ。そんな可愛らしい存在じゃあねぇよ」
「でも君は美しい……俺が今まで出逢ってきたどの子供達よりも綺麗なんだ……！さぁ、俺を天国に導いてくれ！！」
「はぁ？何言ってんだこいつ、自分が殺されるって自覚ねぇのか？あんたが今行くのは天国じゃなくて地獄だろ」
天使はスッと目を細め、どういう仕組みかわからないが槍を編み出す。けれど俺はそんな姿すらも美しく見えて、うっとりしてしまった。
「……やっぱやめた。殺そうとしてんのにそんな嬉しそうな顔をされたら、断罪の意味がねぇ。ここで殺れば俺の負けみてぇじゃねぇか畜生」
チッ、と舌打ちをして苛立ちを露にする天使。嗚呼、なんて子供ら

しく感情に素直で可愛いんだ。
小さな子供、というより彼は既に大人へと少しずつ近付いている少年なのに、何故こんなにも美しく見えるのだろうか。やっぱり、あの吸い込まれるような暗い瞳がとても綺麗だからか？
「しゃーねぇ、さっさと帝具盗って後は警察に突き出すか」

その時俺は当然焦った。待ってくれ、そんなの嫌だって。俺はただ子供達に癒されてただけなのに、なんで警察なんかに捕まらなきゃならねぇんだって抵抗すると、
「はっ、自分の罪すら認識してねぇとはとんだ自己中野郎だな。だから天国に連れて行って貰えると思ったのか。どこまでも救いようがねぇみてぇだな、あんた」
鼻で笑う天使が、蔑む目で俺を見下ろした。
「さぁて。ご褒美だって勘違いしてるクズをどうやって地獄に落とすか考えねぇとなぁ……」
まるでご馳走を見るように、舌舐めずりをする天使。それがなんだか色っぽくてむしろ興奮してしまう。そして癒し欲しさに我慢ならず、俺は遂に飛び付いた。
しかし伸ばした腕が掴まれたかと思えば、一瞬で視界が反転した。そして少しの間を置いて気付く。俺はそれなりに体重が重い筈なのに、あんな小柄な少年にぶん投げられたんだって。でもそんな強い天使に、俺は益々惚れた。
「決めた!!俺は君に付いて行くぜ天使!!」
「ああ?!!意味わかんねぇ、なんでそうなるんだこのデブ!!さっさと死んで帝具寄越しやがれ!!」
「でも帝具ってのは適応者じゃねぇと使えねぇんだろ?だったら既に使ってる俺が一緒に行けば君の力になる!使用者探しが省けるぜ!」
うろ覚えな知識を口にしてみると、天使は反論出来ずに狼狽えた。
「……チッ!仕方ねぇから新しく使えそうな奴が見付かるまでは同行を許可してやる。だが変な事したらすぐにぶっ殺すからな!」
それが、俺の元に舞い降りた真っ黒な天使との奇跡の出逢い。以降

俺は、天使から受ける痛みにも快感を得るようになったのだった。

――いつものように夜な夜な日課の江雪の食事に没頭していたあの日。奴は突然現れた。

「へぇ…綺麗な刀じゃねぇか。赤い血の色がよく似合うね」

「…!!わかるのか!?この江雪の美しさを…!」

「江雪?あっはは!刀に名前を付けるなんて変わってるなぁ、あんた。そういうタイプの面白い奴は好きだぜ」

ケラケラと愉快に笑う彼は拙者の江雪の美しさを認めてくれた。そんな者、刀鍛冶の人間でさえも一人も居なかったというのに。江雪を愛する拙者を理解してくれたのは、彼が初めてだった。だから興味を惹かれるのは当然でござろう。

「お主、名はなんという?」

「俺はラバック。地元では魔皇って呼ばれてる大罪人だ」

魔王……。つまり、相当重い業を背負っているというわけか。まだ二十歳にも満たしておらぬ程若く小さい身体なのに大したものだ。

「あんた、帝具って知ってるか?大昔にうちのバカなご先祖サマが造らせた四十八種の超兵器なんだけどよ、あんたがその一つを使ってみる気は……ねぇか」

江雪を手離す気は毛頭ない、という意思を表す為に抱え直すと、上手く伝わったのかその者……魔皇は諦めたように落胆する。

「うーん…強い帝具使いが欲しくてスカウトしようと思ってたんだけど、まず試そうとすらしてくれねぇか。困ったなぁ……」

「スカウト?」

「そ、仲間探しのね。でもま、あんたの実力はさっき陰から見させて貰ったし、帝具じゃなくてもそんだけ溺愛してる刀がありゃあ充分使えるかもな」

!!此奴、いつの間に拙者の戦いを見ていたのか。姿が見えずとも気配や視線で見抜けるというのに、全く気付けなかった。

「お主、江雪の美しさがわかるだけでなく相当な手練れのようでござ

るな。気に入った、拙者も連れて行ってはくれぬか？唯一の理解者であるお主ともっと話がしたい。良き友になりたい…！」
「友？へぇ、こりゃまた新鮮なお願いだね。良いよ、俺もあんたと友達になってみたい。もっと語ろうぜ、美しくも儚い血に濡れた、その子（江雪）の良さを」
一瞬驚いて、すぐにまた微笑む魔皇。それが、拙者のかけがえのない初めての友が出来た瞬間だった。

「――よく集まったな、お前達。改めてこの腐敗した帝国へようこそ」
時は戻って現在。各国から帝国に足を運んだ五人はそれぞれの意思で魔皇の召集に応えた。
「今日から我々魔皇軍ワイルドハントは帝国の悪人共を標的に破壊活動を始める。さぁ、逸れ者の飢えた捕食者達よ、堕落したクズ共に制裁を与えようぞ!!」
その一言を合図に、彼らの活動は始動する。そして白昼堂々と悪人の殺戮を繰り返し、大臣一派に協力する町や村も血の海にしていったワイルドハントの名はすぐに帝都内で広がり、殺し屋ナイトレイドに次ぐ凶悪な犯罪組織として帝国を震わせたのだった。

動き出す勢力

「――兄上が、帝国に…!?それは本当か大臣!?」

帝都宮殿、謁見の間。数年前幼くも大臣の支持によって現皇帝陛下へと降格していたミカドは、久しく聞いた兄の名に狼狽した。

「はい。帝都を訪問なさったチョウリ氏から聞いた話によると、今は私の愚息や各国で集めた仲間と共に行動しているとか……。魔皇軍『ワイルドハント』などという犯罪組織を名乗って、今度こそ我が国を滅ぼそうとしているようです」

「っ!!何故なのだ兄上……何故、帝国を滅ぼそうなどと…!帝国は父上達が…皇帝一族が代々守ってきた大切な国だというのに…!余にはわからぬ……兄上の考えている事が、何もわからぬ…!」

あの日からミカドの大好きだった兄は壊れてしまった。だがミカドはその原因すらもわかっていない。何が彼をあそこまで追い詰め、両親を殺させてしまったのか。その真相も知らず元凶が自分の目の前に居る者だと気付かぬまま、当時の惨劇を嘆く。

「陛下、兄君についてもう一つご報告があります。魔皇は先日から、帝国の地方軍の拠点を次々に破壊し、見せしめにその町や村を焼いて血の海に染めているとの事。もう、あの頃の優しい殿下とは別人ですね」

悲しげな演技をするオネスト大臣の口から出た報告に、ミカドは更に打ちのめされる。何度も何故と問いても誰も答えてはくれない。

だが一方でオネストは、邪魔なチョウリを処分出来なかったのも含め、魔皇の行動に内心少し焦っていた。

「(全く、民間人を盾にすれば手出し出来まいと思いきや、まさかそれ諸共消しに来るとは……。あれだけ弱い民がどうとかどうでも良い正義感をほざいていたのに、それすら捨てる程私への憎しみが強いみたいですねぇ)」

愚かな両親と同じだと鷹を括っていた大臣にとって、罪のない民間人すらも無慈悲に殺していく魔皇の快進撃は誤算だった。最初は自分の息子が持つシャンバラで人々を逃がしているのかとも疑ったが、

現場に残った焼死体の数でそれはないと断定している。オネストが思っていた以上に、彼は憎悪に囚われ壊れていたのだ。
「にしても、あの三獣士が呆気なく殺られてしまったという事は、魔皇軍も全員帝具を所持していると見た方が良さそうですなぁ。賊のナイトレイドも含め、ここはエスデス将軍に任せるべきですかね」
「そう、だな……。ただでさえ異民族を抑えて貰っているのに更に強敵の組織を二つも任せてしまうのは申し訳ないが、宮殿を護るブドー大将軍や各地域に滞在する他の将軍達を安易に動かすわけにはいかんからな…」
「左様でございます。それに、エスデス将軍には約束通り強い帝具使いを六人用意しましたので。彼らの活躍を期待しましょう、陛下」
　密かに感じている焦りを顔に出さず、ミカドを安心させるようにこやかに話すオネスト。だがエスデスだけに任せるのはやはり厳しい為、暗殺部隊も同時に動かすべきかと思案中である。
　しかし幸い、魔皇軍の行動から見て、彼らと反乱軍は敵対し合う可能性が高い。そのまま潰し合って共倒れしてくれれば漁夫乗りで帝国の一人勝ちが出来、無駄な労力や資金も掛けずに平和を取り戻せて万々歳だ。
「(兄上、貴方が帝国を憎む理由は余にはわからぬが……父上達が護ってきたこの国を壊そうと言うのであれば、余も手加減はしない。余は皇帝として、私情を挟むわけにはいかぬ。この国を護る為に、必ず兄上を討ってみせる…!)」
　真実を知らぬミカドは一人誓う。例え唯一血の繋がった兄弟であろうと、帝国の敵は全て排除すると。
「……大臣、忙しいのにすまないが、仕事を頼んでも良いか？いずれ来るであろう決戦の日に余も戦えるように……アレを復活させて欲しい」
　幼い皇帝は、この時決意してしまった。いつか兄と直接戦う道を。理解し合えないまま、死闘を繰り広げる未来を選んでしまったのだった。

「――鮮血の魔王？なんだそりゃ？」
時と場所は変わって帝都近郊にあるナイトレイドのアジト。本部と連絡のやり取りをしていたナジェンダの報告に、世間に疎い新入りのタツミが首を傾げる。
「あんたそんな常識まで知らないの？鮮血の魔皇といえば、先帝とその后妃を殺した実の息子。数年前に宮殿で殺戮を起こして脱獄した元皇帝一族の大罪人よ」
戸惑うタツミにマインが呆れて答えると、彼はぎょっと驚く。
「先帝の息子!?そんな偉い人がなんで両親殺したりむごい事件起こしたんだよ!?それも大臣の仕業だっていうのか!?」
「……その真相は、本人以外誰にもわからん。だがこれだけは言える。私の知っているラバック殿下は、我々のように民を憂う優しい人物だった」
かつての主と共に笑顔でお茶会をしていた昔を懐かしみ、どこか遠くを見つめて煙草の煙を吐くナジェンダ。その目には、何かを後悔しているような感情があった。
「殿下は今、魔王軍ワイルドハントと名乗って帝国各地にある大臣一派の勢力を削っているが、その有り様が酷い。帝国のクズ共が滞在していた町や村には何の罪もない住民達も原形を失う程無惨に焼き殺され、どこも血の海と化している。反乱軍としては、彼らの所業を見過ごすわけにはいかない」
魔皇軍に殺された住民達は、どこも帝国に脅されて仕方なく従っていただけだった。なのに帝国に協力していたという理由だけで皆殺しにするのは間違っている。あくまでも民の味方である反乱軍は、彼らを敵と見なすべきだと判断したようだ。
「ワイルドハントは見付け次第排除しろと本部に言われている。……だが私個人の意見を言わせて貰うと、数年前の事件も含め殿下がそんな非道な真似をするとは到底思えない。話が出来そうであれば、戦う前に直接真相を問いたい。身勝手な我が儘で申し訳ないが、お前達にも協力して欲しい。頼む」

ナジェンダはナイトレイドのボスとしてではなく、一個人として部下達に深く頭を下げる。革命軍の命令に反するかもしれないが、それでも彼女は彼を信じたかった。
「……俺はそいつの事をよく知らねぇけど、ボスが俺達に頭を下げてでも信じたい相手だってのはわかったよ。だから俺はボスに賛成する。でも、もしダメだったら……」
「ああ、わかってる。私もその時は戦う覚悟をしている。今までもそうやってきたからな」
かつて信頼し合っていた者達との殺し合い。それは帝国を離反した彼女にとっては何度も経験してきた事だ。決して慣れはしないが、相応の覚悟がある。タツミだけでなく他のメンバーにもそれが伝わり、仕方ないと言わんばかりに同意する事にした。
「私が従うのはボスの命令だ。話し合いが可能であれば協力しよう」
「親友がそう言うなら私も手伝うよ。健気なボスの恋路に邪魔が入らないようにしないとね」
「こっ……!?ち、違うぞ！私と殿下はそういう関係じゃない！ただ彼を主として慕っていただけだ！」
「え～？ほんとかなぁ～？」
「レオーネ、あんまボスを虐めてやるなよ。頑張ってクールを装ってんのにからかうのは野暮ってもんだぜ？」
「だから違うと言ってるだろう!?ブラートも私が恋をしてる前提で話すな!!」
ニヤニヤとからかわれて顔を真っ赤にさせるナジェンダが恋をしてるかどうかはさておき。こうしてナイトレイドは魔皇軍と遭遇した際にはまず話し合いを持ち掛ける方針に決定した。
「魔皇軍が次に現れるであろう場所は既にいくつか見当が付いてる。相手は全員帝具使いである可能性が高いが、帝国よりも先に見付ける為、ツーマンセルで各自配置に付き待ち伏せするぞ！」
「「応!!」」
「「了解！」」

「――～♪～～♪」
　再び場所は変わり、とある地方の田舎町。赤く染まった跡地へと変わり果てたそこで返り血を浴びたまま鼻歌を歌うのは、帝国と反乱軍が大きな脅威として危険視している鮮血の魔皇、ラバック。
　新しい玩具を探す子供のような軽い足取りで躊躇なく肉塊を踏み歩く魔皇の手にあるのは糸で作り上げた血まみれの槍。当然、その町に居た帝国の雑兵は全滅……かと思いきや、
「こ、の……っ、化物め…っ！」
　肉塊の下で死んだフリをしていた重傷の兵が、魔皇に銃口を向ける。しかし、
「あれ？おーい、狩り残ししたの誰だよ？獲物はちゃんと一匹残さず殺せっていつも言ってるじゃん。中途半端に生かしたら可哀想だろ」
　少し離れた場所に居る仲間に文句を言いながら、魔皇は槍を振るって銃弾を弾き、そのまま兵士に近付いて首を斬った。
「あ？それまだ死んでなかったのかよ？意外としぶてぇ雑魚も居るもんだなぁ」
「エンシン、また嬲って遊んでたな？返り討ちに合い易いから程々にしろって何度言えばわかってくれんだよ」
「そん時は自己責任って事にすっから軽いお遊びくらい良いだろ、大将？女は全部シュラが食っちまったし、暇だったんだよ」
「ったく、あんたらほんと懲りねぇなぁ……。シュラ兄！女遊びが好きなのは良いけど、たまにはエンシンにも分けてやれよ！」
「んだよ坊っちゃん、童貞卒業出来てねぇからって拗ねんなよ」
「拗ねとらんわ!!童貞言うな!!」
　気にしてないと言いつつ本当はかなり気にしているコンプレックスを言われて、ラバックは義理の兄であるシュラをキッ！と睨む。だが効果はなし。いつもの事だ。
「魔皇様～！今童貞がどうとか聞こえましたけど、遂に魔皇様の童貞をコスミナちゃんにくれるんですか!?」
「違ぇわアホ、いちいちそれ聞く度にとんでもねぇ勘違いすんな。お

前は呼んでねぇから先帰れ」
「どうせ捧げる相手なんて居ねぇんだろ？ならそのままコスミナにでもあげちまえよ大将」
「てめぇは俺を殺す気か。お前こそ女と遊びたかったんだろ？俺の代わりに相手してやれや」
「いや、あれだけは無理だわ」
　はぁはぁと息を荒げながらラバック達の元に行き、期待の眼差しを向けるコスミナの性欲に勝てない男性陣は彼女の姿を見ただけでげっそりとした。ラバックとエンシンはもはや押し付け合いを始める程である。
「おいブス！てめぇ俺の天使に手ぇ出そうとすんじゃねぇ！天使の貞操は俺が頂くって決めてんだ！」
「ラバったらほんとモテモテだよねぇ。よっ、変態に好かれる天才美少年！」
「お前らそれ以上喋ったらマジで殺すよ？」
　ラバックを天使と呼ぶチャンプと、そのやり取りを見て茶化す義姉のメズ。更にそこに合流したのは幼い外見をした錬金術師のドロテアと、妖刀江雪を盲目的に愛する人斬りの剣士イゾウである。
「相変わらず騒がしい奴らじゃのぅ。おかげでゆっくり食事も出来んわい」
「拙者の江雪ももっと血をくれと求めている。ラバック殿、本日の獲物はもう居ないでござろうか？」
「ああ悪ぃな、今日はここまでにして撤収だ。これで敵の増援が来たらまたたっぷり食べさせてやりな。ドロテアも帰ったらちゃんと報酬やるから大人しくしてくれよ」
「わかっておるなら良い。今回もかなりの重労働で疲れたからのぅ、相応の報酬がなければやっていけんわい」
　ワイルドハントのメンバーはこれで全員。一人一人に声を掛けたラバックに付いて行く彼らは、それぞれ理由は違えど自分達のリーダーを慕っていた。
「ラバ。もし帝国軍と反乱軍、どっちも来たらどうすんだ？」

「もちろん帝国軍優先。正直こっちは反乱軍を潰すメリットがないからね。でもあちらさんが戦う気満々だったら相手するしかない」
「じゃあ三つ巴になる可能性もなくはないのかぁ～。それはそれで楽しそう♪」
「楽しむな。そうやって油断してると死ぬぞメズ姉」
「大丈夫大丈夫！アタシらには頭の良い弟が居るんだしよ！背中は心配いらずだぜ！」
　義兄との会話を聞いてケラケラ笑う義姉に、調子の良い事言いやがって、とラバックはぼやく。だがその表情は満更でもなさそうだ。
「ほら、やる事は全部終わったからさっさとアジトに戻るぞ」
　最年少のリーダーに促され、時間を掛けて調教された四体のワイバーンの背に二人ずつ乗っていくワイルドハントの面々。シュラのシャンバラがあるのに何故危険種を扱っているのかというと、その帝具は既に何度か使用済みで、使用者の体力の問題で帰りには使えないからだ。
「さて、ここまでやればそろそろ誰が来るでしょ。帝国と反乱軍、どっちが先に釣れるか楽しみだな」
　わざと目立つ行動をして誘われる獲物を待つ中、ラバックは頃合いだと口角を上げる。
　――魔皇と彼らの邂逅は、もうすぐそこまで迫っていた。

暗殺者と魔皇の邂逅

帝都から離れた小さな村の集落。その近辺にある地方軍の基地に警戒しながら変装姿でそこに侵入した俺（タツミ）と姐さんは、帝国軍よりも先に魔皇軍ワイルドハントを探す事に専念していた。

「なぁ姐さん、本当にこんなところに魔皇軍が現れるのか？パッと見ただの平和な村にしか思えないんだけど……」

「さぁ？でも奴らが潰してるのは帝国の指示に従ってる集落ばかりらしいから、帝都に物資を送ってるここも襲われる可能性はなくはない筈だ」

「そっか……。けどその物資を運ぶ作業って村の人達が無理矢理やらされてるだけなんだろ？だったら魔皇軍より先にここの役人達を暗殺するのもアリなんじゃねぇの？それなら村人達が殺される事も……」

「タツミ、ボスの話を聞いてたか？奴らは一度協力したって理由だけで民間人を虐殺したんだぞ？裏で糸引いてる悪人がもう死んでようが死んでなかろうが関係ないよ。そいつの処理は今夜するけど、日中は魔皇軍が出てくるまで監視だ」

旅人を装うマント姿でひそひそと小声で話す俺達二人は、ボスの命令通り今夜狙う標的を見付け、こっそり気配を消して後を付けている。……なのに、

「やる気満々なところ悪いけど、お前らの獲物は今からこのメズ様が頂くぜ！」

「ッ!!?!!」

突然背後から聞こえた声に振り返ると、そこには仮面を付けた褐色肌の少女が笑っていた。しかしその少女に何者かと問う前に、彼女は標的へと駆けて行く。

「疾い!!?」

「あの仮面は…！もしかしてあれが魔皇軍の…!?」

魔皇軍の特徴の一つと言われた仮面とフード付きの長いローブ。そして真っ先に標的へと向かい、護衛も全て速やかに殺していく鮮や

かさ。間違いない、あれはワイルドハントの一員だ。
「タツミ、追うぞ！」
「了解！」
周囲で一般人の悲鳴が上がる中、獣化した姐さんと一緒に魔皇軍と思われる少女の追跡を始める。
……が、なんだか都合が良過ぎる気がする。こんなにあっさり標的を見付けられるものなのか？頭の隅でそう考えている間も少女を追い続けていると、一瞬脚に違和感を感じた。
「…!!伏せろタツミ!!」
「えっ？」
何かを察知した姐さんが俺に突進し、一緒になって前に倒れる。するとちょうど俺の居た場所に、どこからかナイフが飛んできた。違和感の正体はどうやらこれを起動する為のトラップワイヤーに引っ掛かってしまった事によるものだったようだ。
「あ、あっぶねぇ…！ありがとう姐さん、助かった！」
「礼は良い。それよりマズいぞタツミ、この村全体に罠を仕掛けられてる！下手に動くと危険だ！」
警戒して周囲を見回す姐さんの目には無数に張り巡らされた糸が映っているらしく、俺達が侵入する前から準備されていたと悟る。まるで蜘蛛の巣みたいだ。これでは先程の少女を追えない。
「はい、二名様確保～♪俺らと同じ標的を狙ってたって事は、あんたらが噂のナイトレイドかな？」
「ッ!!?!!」
突然聞こえた声の方へ視線を向けると、そこには宙に浮いた少年が。トリックがわからず一瞬困惑するが、よく見ればその足下には何重にも張られた糸があった。少女と同じ仮面に緑のコートを着た少年は愉快げに笑って上から俺達を眺めている。追い詰めてやるつもりが逆に罠に填められてしまったようだ。
「お前、いつからそこに…!?」
「初めまして、革命軍の暗殺者さん。俺は魔皇軍ワイルドハントのリーダー。あんたらが鮮血の魔皇と呼んでいる大罪人のラバックだ」

「!!」
自ら名乗り、仮面を外したのは俺達が探していた魔皇本人。まさかいきなり大本命が出てくるとは思ってもみなかった。
「あんたが魔皇か。そりゃ好都合だ。悪いけど、このまま私らに従って貰っ……」
「もちろんどうぞ。そちらの縄張りに連行してくれるなら拘束するなりなんなりして俺を捕虜にでもしてくれちゃって構わないよ」
「……は？」
場にそぐわぬにこやかな笑顔で捕虜にしてくれと自ら志願する魔皇に、思わず間抜けな声が出る。いくらなんでも怪し過ぎる、こいつは一体何を目論んでるんだ？
「あ、やっぱ怪しいって思う？よく胡散臭いって身内にも言われてるもんなぁ、そりゃそうか。でもね、俺はあんたらのボスとお話がしたいだけなんだ。そっちから攻撃を仕掛けて来ない限り、戦う気はないよ」
友好アピールをしてくる魔皇は本当に戦う気がないようで、敵意は一切感じない。でも、
「じゃあさっきのナイフはなんだよ。あれは確実に殺意があったろ」
「ん？ああ、ごめんごめん。あれは帝国側の奴ら用に準備してた罠でね。直前まであんたらがどっち側の人間なのかわからなくて回収出来なかったんだ」
そう言って、申し訳なさげに謝罪する魔皇。なんというか、魔王って呼ばれてるからもっと高圧的なイメージがあったんだけど、意外と飄々とした軽い口調でフレンドリーに接してくるからどことなく親近感がある気がする。……本当にこんな奴が殺戮を繰り返してるのか？
「とりあえず、あんたらがナイトレイドだって確信出来たし、そこら辺の糸は回収するぜ。あ、でも仕事の邪魔はすんなよ？今大事な作業中だから」
「!!仕事って、まさか本当に住民達を…!?」
罪のない民間人を巻き込んでる噂は本当だったのかとショックを

受けた俺に、そいつはクスリと冷笑を浮かべた。
「ふっ、ああそうさ。なにせ俺達はこの世の全ての敵、魔皇ぐ……」
「ラバック様!!この度は我々を助けて下さって本当にありがとうございます!ワイルドハントの皆様のおかげで、この町の住民全てがもう悪政に苦しまずに家族と平和に暮らせます…!」
　悪そうな表情をした魔皇が何かそれっぽいキメ台詞を言おうとしたその時、彼の元へと走ってきた住民らしき男性が土下座をしながら心の底から感謝の言葉を叫んだ。
「あっ、いや……んゞんゞっ!……礼などいらんと言っただろう。さっさと行け」
「ですが、この感謝の気持ちだけはお伝えしたくて…!このご恩は一生忘れません!我々でも何か手伝えそうな事があればいつでもお呼び下さい…!」
　予想外な事態だったのか魔皇がかなり動揺した様子で咳払いし、その後手でしっしっと追い払う仕草をすると男性は再び頭を何度も下げてから同じ道を戻って行った。
「「……」」
「……なんだよその顔は」
「いや、魔王キャラ作るの大変そうだなぁって」
　うわぁ、言っちゃったよこの人。流石姐さん、勇気がある。同情の目で言われた魔皇はというとカァーッと顔を赤くし、羞恥で身体を震わせていた。
「う、五月蝉ぇ!!キャラなんか作ってねぇよ!!」
「いやいや、明らかに作ってるっしょ。だって今のが素なんだろ？ただのガキじゃん」
　姐さんが更に煽るとキッ!と睨まれた。あれ？こいつ煽り耐性低くね？パッと見た感じ俺と同年代っぽいし、姐さんに弄られてる様子を見てると益々親近感が沸いてきた。なんて思ってたら彼と目が合ってしまった。
「お前今失礼な事考えてたろ…？」
「うえっ!!?い、いえ、なんの事でしょうね!?」

「嘘下手くそか」
「お前もな、魔皇サマ」
　どもった俺に指摘するもまたしても姐さんがおちょくって怒らせる。姐さんめ、遊んでやがるな。これじゃあ話が全く進まないじゃねぇか。
「と、とにかく！さっきの見た感じじゃあ、住民を殺してたのはあんた達じゃないんだな？」
「残念、その答えはＹＥＳでありＮＯだ」
「あ？なんだそれ、とんちか？」
「殺してはいないが殺したように見せかけていた、ってのが正解。要するに、今まであんた達が民間人だと思っていた死体は全部ダミーなんだよ」
「「ダミー!!?」」
　衝撃の真実を暴露した魔皇の言葉は信じ難かった。本部から届いた報告書では原形を保っていないと聞いているとはいえ、死体は全て人の形をしていて血も大量にあったと記述されていたから。その怪訝を読み取ってか、魔皇は更にこう続ける。
「うちには西の国に伝わる錬金術っていう奇怪な技術を持つ部下がいてね。新鮮な危険種の死体を媒体にして分解し、人っぽい形に再構築すれば簡単に作れるらしい。だからそれを使って住民達は死んだ事にして、今はシュラ兄……うちの参謀的な奴の帝具で厳しい法律のない無人島に移して楽しく生活させてるよ」
　種明かしを披露するように両手を広げて話す彼はニコニコしていて、正直でたらめにしか聞こえない。でも、本当にそうだとすればその人達は帝国の悪政に苦しまずに済むと思うし、さっきの男性の言っていた事とも辻褄が合う。
「信用されてないのは承知の上。てなわけで証拠を見せたいから一緒に来てくれない？」
　宙に張られた糸から華麗に飛び降りてきた魔皇に、付いて来いと促される。しかしその先から騒ぎを聞いてやって来た帝国軍の兵士と遭遇してしまった。

「チッ、さっきから邪魔が多いな。イゾウ、江雪の飯にしてやれ」
「承知」
　俺と姐さんは咄嗟に身構えたが、魔皇が指を鳴らした瞬間、変わった風貌の男が俺達の横を通り抜け、複数居た兵士達を一瞬で斬り殺した。
「あの数を一瞬で…!?あいつも帝具使いか!」
「いいや、イゾウが使っているのはただの斬れ味の良い刀。でもあいつは刀への強い愛情のみで帝具使い相手に互角で戦える剣豪だ」
　信じられない。今のを帝具無しでやったってのか?さっきの女の子もだが疾過ぎる。一振りしかしてないように見えたぞ…!?
「紹介しよう。こいつは妖刀江雪を恋人と言って愛する人斬りの剣豪、イゾウ。未だに俺が帝具を持たねぇかっつっても固くなに聞いてくれねぇんだぜ。面白い奴だろ?」
「ラバック殿こそ、そんな拙者を理解し友として認めてくれたでござろう?面白いのはお互い様でござる」
「そう?一番面白いイゾウに言って貰えるだなんて光栄だねぇ。因みにさっきあんたらが追い掛けようとしてたのは俺の姉みたいな幼馴染みのメズ。あいつもイゾウと同じで帝具は持ってないぜ」
　こちらから聞いたわけでもない情報もペラペラ喋って教えながら、魔皇は目的地へと移動しようとする。どうするべきか少し迷ったが、姐さんと頷き合ってとりあえずは付いて行く事にした。

旧友との再会

見事に釣れたナイトレイドの二人を俺(ラバック)が案内し、うちのメンバー(ワイルドハント)を一通り紹介した後。やっと少し警戒心を解いてくれた少年の名はタツミで、もう一方のグラマスなお姉さんはレオーネという名前らしい。

そして本題。先程の話の証拠として、ドロテアの作業を見せた。

まず用意するのは事前に捕まえていた危険種の血肉。生成を行うドロテア曰く、どうせ形を変えてしまうんだから血が赤けりゃなんでも良いとの事。それを地面に描かれた複雑な円陣の中心に置き、術者のドロテアが手をかざす。するとそこから閃光が放たれ、危険種の肉は形だけは人間のように変化していく。これで死体のダミーは完成だ。

「えっ、それだけ？確かに報告で聞いてた通りの人っぽい形だけど……」

「うむ。後はいつものように村を焼き払えば焼死体に見えるじゃろ？じゃが実はただのこんがり焼けた危険種の肉。なんなら種類によっては食えるぞい」

「ああ、なるほど。そりゃ気付けねぇわけだ」

「ね、姐さん、よく平気でいられるな？思ってたより結構グロくて俺は見てらんないぜ……」

ドロテア先生の講座を平然として聞くレオーネさんの横に居たタツミが顔を真っ青にさせて、うげぇ…と若干吐きそうなのを訴える。帝都で有名な殺し屋ならこの程度大丈夫だと思っていたんだが、こいつは案外純粋な奴のなようだ。

「とまぁ、毎回こんな感じで凝った準備をしている俺らへの疑いは多少晴れたかな？そろそろまた増援が来そうだから、早めに結論を出して欲しいな」

「あ、ああ。とりあえずはあんた達を信じる事にするよ。姐さんもそれで良いか？」

「構わないよ。ボスもあんたと話したがってたし、元よりあんたをボ

スのところへ連れてくのが私達の目的だ。戦う気があればやむを得なかったけど、自分から会おうとしてくれるならこっちも助かる」
「!!……そっか。あの人はこんな俺を、まだ信じようとしてくれてるんだね」
　かつての旧友との話し合いの余地があると聞いて、嬉しいような、怖いような。なんとも言えない気持ちが込み上がってくる。
　自分で話したいと言っておいてあれだが、今の俺を彼女が見たらどんな反応をするんだろうか。悲しい顔をする？それとも幻滅？軽蔑？考えてみるだけで恐ろしい。だって昔の俺は、彼女と楽しく談笑する一時がとても幸せだったのだから。
　もう遠く感じる思い出に浸っていると、隣に居たメズ姉が心配そうに名を呼んだ。それをきっかけに意識を現実に戻した俺はなんでもないと返す。
「シュラ兄、ここの住民はもう移動させた？」
「ああ、とっくにな。今回は規模が小せぇから身体の調子もまだマシだぜ」
「それなら良かった。最近ずっと多用させてほんとごめんな？当初の目的通り反乱軍側との接触が出来たから、今後はもうやる必要もない。帰ったらゆっくり休んでくれ」
「お前に言われずとも勝手にそうするさ。それよかお前もいい加減休んだらどうだ？ドロテアの給料上がったせいで貧血が続いてるだろ？」
「うげっ、バレてた」
　シュラ兄を心配してた筈が逆に心配されてしまった。なるべく顔に疲れを出さないようにしてたけど、そんなに体調が悪そうに見えるだろうか？
「天使！この村は小さい子供が多かったから後で新しい玩具買ってやっても良いか？こないだのは多分もうみんな飽きちゃってると思うからよ」
「しゃーねぇなぁ。お前個人が帝都で稼いだ分はお前の給料だ、それで買ってやれ」

「よっしゃあ!!さっすが天使！話がわかるぜ！」
「大将、また帝国の雑魚共が来たぜ。さっさと燃やしてずらからねぇとマズいんじゃねぇか？」
「そうだな。じゃあドロテア、いつも通り宜しく」
「ほいほい。相変わらず人使いが荒いのぅ……」
　チャンプやエンシンとも会話を交わしてからドロテアに指示を出し、今まで通り錬金術で村に火を放って貰う。本当はチャンプの『ダイリーガー』に跡形も残さぬ火炎玉があるのでそれを使った方が手っ取り早いのだが、やり過ぎたらダミーが意味を成さず、シャンバラの存在を知ってる帝国側に住民の生死を疑われるのであいつの帝具はまだ隠したまま使用しない。
　まぁ、向こうには神ノ御手『パーフェクター』を持つマッドサイエンティストが居るので、少しでも調べられたら焼死体の正体は一発でバレるだろうが。だからこそ、探していたナイトレイドに出逢えた今の内に撤退する。かなり危ない賭けだったが、いくつかあった町の候補から俺らの狙う場所を見事に当てて貰えて助かった。
「魔皇様～！ワイちゃん達の準備はバッチリですよ～！」
「おっ、もう先にやっててくれたのか。偉いぞコスミナ」
「えへへ～、もっと褒めてくれても良いんですよ～？魔皇様の為ならコスミナちゃん、なんでも頑張りますのでっ！」
　いつの間にか居なくなってると思ったらワイちゃんことうちで飼っている特級危険種のワイバーン（知らん間にコスミナが勝手に命名した）の手配を済ませたコスミナが、頭を前に突き出して撫でてくれと俺にねだる。俺の方が当然年下だから正直気まずいんだが、その程度で満足してくれるならばと、とっくのとうに慣れて対応してやっている。
「……なんつーか、意外と慕われてるんすね、ラバックさん」
「ラバで良いよ。って、意外ってなんだ意外って。こん中では最年少だが俺はこれでもリーダーなんだぞ」
「あっ、じゃあやっぱり俺と同年代くらい？どうりで親近感があるわけだ」

「うん、確かに同年代だけど言い方がちょっと腹立つな…？」
　タツミをバカにしてるわけじゃないが、遠回しに子供っぽいと言われているような気がして若干イラッときた。こうなったら意地でもこいつに俺のカリスマ性を魅せて自分と同じレベルだって思った事を後悔させてやる。覚えてろよこんにゃろう。
「ほら、ぼさっとしてないであんたらも急いで乗ってくれ。顔もしっかり隠せよ」
「乗れって言われても……本当に危険種に乗れるのかよ？」
「ちゃんと調教してれば一部の危険種は言う事聞いてくれるって前にボスが言ってたぜ。だから多分大丈夫だ。危ない時は私が助けてやるから早く乗ろうぜ、タツミ」
　レオーネさんにも促されたタツミが漸く勇気を振り絞り、ワイバーンに乗る。結果的にそいつは空の旅を思いっきり楽しみ、後から機会があればもう一度乗りたいと子供らしい眼差しで言われた。うーん、親近感かぁ……ないな、全然。俺最初これ怖かったもん、どこも似てねぇよ。こんなん恥ずかしくて誰にも言えないけど。
　そんなこんなで二人の案内の基ナイトレイドのアジトに着き、俺は正面から堂々と入って早々旧友に手を振り不安を隠しながらお気楽に挨拶する。
「どもども、お久しぶりですねナジェンダさん」
　でもナジェンダさんもタツミ達と同様にこんなあっさりと対談に応えてくれるとは思っていなかったようで、今の彼女の事はよく知らないがらしくもなく動揺していた。
「お、お久しぶりです、殿下。お元気そうでなによりです」
「ああ、その呼び方はもうやめて下さい。俺はもうそう呼ばれるような身分じゃないんで」
「で、ですが……」
「うーん、相変わらずお堅いですね。まぁ、貴女のそういうところも友人として好きでしたけど……。昔にも言いましたが適当に名前で呼んで下さい。あと敬語もいりませんから。……俺らは主従関係じゃなくて、友達でしょ？」

なかなか折れてくれないナジェンダさんを説得する為に、やり方は違えど俺と同じように帝国と戦う道を選んでくれた彼女をまだ友人だと思っている事を正直に告白した。それを聞いて、流石のナジェンダさんも折れざるを得なかったようだ。
「……わかった。では、今後はそうさせて貰おう。ところで殿……ラバックの目的はなんだ？民を虐殺するなんて貴方らしくない」
「そうそう、その件について話がしたいからここに案内して貰ったんです。あの死体、実は帝国側の人間以外は全部ダミーなんですよ」
「ダミー？」
先程タツミとレオーネさんにも教えた内容をまた一から説明すると、実際に錬金術の生成を見た二人が証言者として後押しをしてくれた。おかげでナイトレイド全員の信用を完全ではないが得る事が出来、やっと一番の目的の交渉の持ち掛けに成功した。……といってもまぁ、本当は帝国側の死体も一部ダミーなんだけどね。
「今回俺達が目立つ行動をしていた理由は、貴方達ナイトレイドを誘き寄せて接触する為。もっと端的に言うと、交渉がしたいんですよ。俺達ワイルドハントと一時的に手を組んでくれないか、ってね」
「手を組むだと？貴方は我々反乱軍の敵でも味方でもないと言っていたのでは…？」
「ええ。でも今あの女が新たに六人の帝具使いを集め部隊を結成したのならば話は別。あれはうちだけじゃ対処出来そうにない。だからそこで、こちらと同等かそれ以上の実力を持つナイトレイドの協力が必要なんです。貴方達だけなら小規模で小回りが利き、情報が漏れる心配も最小限で済む」
俺が味方だって断言したくないのは、反乱軍という組織が巨大過ぎるから。大きな勢力は力に溺れ堕落し易い。宮殿でそれを見てきた俺は反乱軍もいずれ同じ結果になってしまうのではと危惧していた。でも俺達だけでは対抗が難しい新たな強敵が生まれてしまった今回ばかりは、確実に奴らを潰す為に協力せざるを得ない。うちの奥の手を使う手段も一応あるが、それは最終決戦の日まで隠していたいので選択肢から除いてる。

「正直言うとそちらと深く関わるつもりはないし信頼関係なんて築く気も一切ない。俺が求めるのは単純な力だけなので表面上の仲良しごっこで構わない。けどお互い邪魔しない程度に、同じ強敵を討つまでは力を貸して欲しいんです」
なんて言いつつ、本当はナイトレイドを指名したのは実力だけが理由ではない。この殺し屋集団は、ナジェンダさんが統率しているからである。進んだ道は違えど、昔俺と同じ正義の志を持っていたナジェンダさんだけならその甘さをまだ信用出来る。否、信じたい。これはただの願望だ。
ひねくれて素直になれないまま口にはせずとも彼女の目を見つめ、返事を待つ。そしてナジェンダさんの出した答えは……。
「……わかった、我々も出来る限り協力しよう。むしろそちらからそう言って頂けて助かる。私は昔から慕っている貴方とは戦いたくなかったからな」
「!!ありがとうございます」
ホッと安堵したのはお互い様のようで、思わず揃って緊張が解け、表情が緩む。それがなんだか可笑しくって、一緒になって吹き出した。
「ふふっ、懐かしいですね、この感じ。まるで昔に戻ったみたいだ」
「そうだな。私に勝てないからとチェスでズルをした貴方と口論になって、その後いつも笑い合っていたあの頃のようだ」
「あ、それまだ根に持ってたんすか?」
「そりゃそうだ、ナイトからビームは有り得んだろ普通。勝手にオリジナルルールを作るな」
「だって俺一度も貴女に勝った事がないんですもん。かと言って手加減されるのも屈辱だし、だったらもうぶっ飛んだ自分流でいくしかないっしょ」
「全く、相変わらず自由な人だな、貴方は」
「縛られるのは昔から大嫌いですからね。人生は一度きり、ならばやりたいようにやるべし!」
いつだったかエンシンが言っていた信条を真似てふふん、と胸を張

るも褒めてないと突っ込まれてしまった。こういうやり取りも懐かしいな。さっきまで不安だったのが嘘みたいだ。
「うわぁ、大将が珍しくすげぇ上機嫌だ……。いつものドス黒い笑い方じゃねぇ」
「じゃな。明日は槍でも降るのかのぅ…？」
「でも明るく笑ってる魔皇様、とっても可愛いです～！」
「ハァ…ハァ……！俺の天使が、天使のように微笑んでる…!!これが見れただけで幸せだ…！俺もう死んでも良い！」
　コスミナはともかく他の二人にも色々言ってやりたいが、チャンプの気持ち悪い発言で笑顔がスッと消える。しかも「じゃあ死ねデブ」と内心で留めたつもりだったのについ声に出してしまっていたらしい。でも人様の前だから暴力は我慢してる。俺偉いだろ？
「さっさとチャーシューにでもなってオネストの腹ん中に入ってろ。そんで中毒起こしてあいつ殺せ。そしたら褒めてやるよ地獄に居るお前を」
「殺意が凄い」
「ねぇボス、あれも昔からなの？」
「いや、将校の中では一番殿下と親しかったと自負してるが、私もあんな彼を見たのは初めてだ……」
「そう？うちではいつもあんな感じだぜ？」
「あの坊っちゃんガキの頃から沸点低いからな。癇癪起こすとすぐ帝具で縛り上げようとするから今はまだマシだ」
「マジか」
　ぶつぶつと呪いの呪文を唱えるようにチャンプに殺気を向けていると、幼馴染み二人の話を聞いたナイトレイドは若干引き気味で冷や汗をかいていた。
「ま、まぁとりあえず。協定は無事結べた事だし、今日は疲れているだろうからうちに泊まってゆっくり休んでいってくれ」
「そうですね。じゃあお言葉に甘えさせて頂きます。……あ、そうだ。言い忘れてましたが、先日回収した帝具を引き取ってくれません？三つあるんですけどうちでは誰も扱えなくて邪魔なんです」

「む？貴重な帝具だぞ？うちに渡して良いのか？」
「身内以外では一番信頼出来るナジェンダさんだからこそ安心して預けられるんです。そちらの本部に送っちゃっても良いんで、頼みますよ」
「そうか。では後日ここへ持って来てくれたら私から本部に送り届けよう」
「はい、ありがとうございます」
よく引っ越しする事が多いうちで三獣士から回収した帝具を管理し続けるのは難しい為、ナジェンダさん達に受け取って貰う約束をした。どうせ使える奴が居ないのならば反乱軍に活用して貰った方が有効的。帝国との決戦の時に活躍してくれる事を願う。

……しかしその夜、俺達は油断していた。
「――ふふふっ。ワイルドハントを追っていたら、思わぬ大物も釣れちゃったわね。ほんとアタシってばラッキー♪」
軍隊に等しい数の敵が、村に居た時から俺達を追って来ていたと気付けずに。
「どっちのアジトか知らないけど、ワイルドハントとナイトレイド、纏めて見ぃーーっけ！」

ピンチはチャンス、スタイリッシュにキメる

ナイトレイドのアジトで一晩泊まる事となった夜中。遅い時間までナジェンダさんと談笑してお開きにした後、俺は宛てられた客室へと彼女に案内して貰っていた。

「こんな手狭な部屋ですまないが……」

「いえ、うちよりは広いんでこのくらいで充分ですよ」

宮殿での暮らしに比べて狭い部屋を紹介されたが、むしろ広過ぎると落ち着かなくなっていると付け足すと「大分外に染まってるみたいだな」と笑われた。

そしてナジェンダさんにおやすみの挨拶をして別れ、室内に入った俺はベッドの縁に座ってコートを脱ぐ。睡眠の為にクローステールも外すと、一息付けた安心感のせいかここ暫くの疲れが一気に出てきて眠気に誘われ、もうそのまま夢の世界に旅立てそうだった。……が、

「――ッ!!?」

背後に、人の気配。煙のように現れた刺客が、俺が振り向くよりも先に首に何かを刺してきた。

いつ、どこから、どうやって。そんな思考を回してる暇はない、早く反撃せねば。そう身体に命令しても何故か言う事を聞いてくれず、痺れて動かない俺の身体は重力に従って倒れベッドに沈む。

「て、め…っ、なに……しやがっ、た…!?」

「けひひっ！今お前に刺したのはスタイリッシュ様特製の麻痺毒。特級危険種にも効く強力な毒だから抵抗したって無駄だぜぇ！」

「!!スタイ、リッシュ……だと…!?」

そんなバカな、もうバレていたというのか…！間に合ったと思っていたのに、まさか泳がされていただけだったとは。ここまでの痕跡も消してきたつもりが、僅かな形跡だけで追って来れるなんて想定外だった。完全にやられた。毒で喋る事さえも苦しく、その男の言っていた通り抵抗出来ずに抱えられてしまう。

「こ、のっ…！どこ、に……連れてく、気だ…!?」

「もちろんスタイリッシュ様のところだ。あのお方は皇帝一族の身体に特に興味があるらしいが、今の皇帝には手を出せないからな。だが犯罪者のお前なら帝国より先に捕まえてしまえばこっそり実験し放題。しかも索敵の役割を持つ厄介な帝具使いを最初に潰せて一石二鳥だぜ！」

「くっ……！」

　気持ち悪い笑い方で目的を喋り余裕ぶってるそいつはクローステールも一つ一つ忘れずに回収し、俺を抱えたまま窓から外に脱出する。昔からそうだったがスタイリッシュの野郎は未だに皇帝一族に……いや、アレに固執してるようだ。

「けひひっ！スタイリッシュ様！このトローマ、ご命令通りあの魔皇を捕まえてやりましたぜぇっ！糸の帝具も一緒ですよぉ！このままワイルドハントもナイトレイドも一網打尽だぁ!!」

　くそっ、やっぱりこいつらナイトレイドも狙ってやがる。このままじゃ俺のせいであいつらまで芋吊る式で捕まっちまう。こうなったら、奥の手その壱を使うしかない。

　自分の責任は、自分で取る!!

　口の中に隠していたあるモノをガリッ！と噛み砕く。すると途端に身体中の血管が浮き出ると同時に力が漲り、全身の痺れを無視して男の項部を肘で強く打った。

「ガッ!?!!な、にぃ…!?」

　油断していたそいつへの反撃は成功。よろめいた拍子に拘束から逃れ、落とされたクローステールも即座に取り返した。

「貴様…！毒は全身に回っている筈…！一体どうやって動いて…!?」

「どうやらてめぇらはうちのメンバーを把握し切れてなかったみてぇだな。今俺が動けるのは、超優秀な錬金術師が作った強化薬を使ったおかげさ。借りは返させて貰うぜ!!」

　痛みに悶える敵が立ち上がろうとする間に帝具の装着を終え、瞬時に糸で首をへし折る。

　これでまずは一人目。強者揃いのワイルドハントとナイトレイドが集まっているとわかってて突入したという事は、恐らく敵はまだ数

多く居る筈だ。だがさっきの話が本当なら、こいつらの襲撃は帝国の命令ではなく独断。自己中心的なあのオカマ野郎なら充分有り得る。
「こいつが行こうとしていたのは風上の方角か……。スタイリッシュめ、安全な場所から毒ガスでも撒くつもりなんだろうが、そうはさせねぇ！」
俺を運ぶ間に他の奴らにぶつけて戦かわせているのか、周辺に張った糸の結界に集団の反応はない。でも多くの死地を潜り抜けてきたあいつらの心配はいらないだろう。ならば俺の役目はただ一つ。このまま司令塔であるスタイリッシュのところに行きぶっ殺す。
「ッ!!スタイリッシュ様！トローマを倒した魔皇が異常な速さでこちらに向かっ――」
標的発見。垂直の崖の上に糸を伸ばし、その先にある木に絡めてから戻す事で一気に登って護衛兼偵察班と思われる三人をさっきの男と同様に絞め殺す。残るはスタイリッシュのみ。
「よぉスタイリッシュ、久々の再会だってのによくも毒なんざ盛ってくれたなぁ？この魔皇様に喧嘩売った代償、てめぇ自身に払って貰うぜ!!」
「う、嘘でしょ…？アタシの毒が全く効いてないなんて…！あんた、どこまで化物なのよ!!」
薬物投与の影響で覇気を身に纏う俺を目にして狼狽するスタイリッシュは、血迷った様子で何かの液体が入った注射器を自分に射つ。
「おいおい……そんなんありかよ…？自分の身体を危険種に変えたってのか…!?」
スタイリッシュの身体が突如肥大化し、みるみると姿を変えていく。その歪な姿はまるで怪物のようで、そいつは周囲に倒れた自分の仲間……否、実験体の死体を食べてしまった。
「これぞ究極のスタイリッシュ!!アタシ自らが危険種になる事で化物のアンタを吹き飛ばす!!」
「化物はそっちだろ……。でも、的がデカくなったおかげで狙い易いぜ！」

気色悪い見た目に変わったスタイリッシュの拳を躱し、その巨大な身体に糸を巻く。だが、
「こんな細い糸、全部千切ってしまえば関係ないわ!!」
「何っ!?」
外見だけでなく筋力もこちら以上に大幅に上がっているようで、巻かれた糸はいとも容易く千切られてしまう。こりゃ簡単には倒せそうにねぇな。
「でもまだまだこの大きさじゃ足りないわ!アレには届きそうもない……!アレを超えて更なる高みへ立つ為にも、アンタの事も食べてもっと大きくならなくちゃあ!!」
「……高望みばっかしやがって。お前は本当に昔から懲りねぇ奴だな」
アレを超える為。そうと聞けば尚更ここでこいつを消すべきだ。しかし強化薬の効果時間は残り僅か。その前に、
「どうせそっちの薬の効果はもう切れそうなんでしょ?その前に決着付けようとしてるのはバレバレよ!」
「チッ、流石にバレてるか。でも……嗚呼、良いねぇ。この緊張感、堪らねぇぜ…!!」
「…ッ!!」
どちらが死ぬかわからぬ命を賭けた死闘の楽しさに歪んだ笑みを浮かべると、自分の方が優位だと勘違いしていたスタイリッシュはビクリと怯えた。
感覚はなくとも手癖のみで糸の槍を素早く編み出す。そして巨大な拳や身体から生えた注射器のような針の攻撃を掠めながらも、崖を登った時と同じように他の糸を駆使してその巨体を駆け登り、頭部に居る本体へと突進する。
同時に掠り傷からの出血も酷くなっていくが、急所への攻撃は全て槍で弾いているのでそんなものは関係ない。むしろ毒で血が流れていく感覚と痛みを失ってるせいでスリルが物足りないくらいだ。
「な、なんで怯まないのよ!?攻撃は確かに当たっているのに!!」
「それはてめぇが仕込ませた毒のおかげで痛みがねぇからだよ!自慢

の薬が逆手に取られて残念だったな、スタイリッシュ!!」
「ッ!!く、来るなあぁぁーーーッ!!」
絶叫が響いた刹那。ザシュッ、と首を斬り落とした音が耳に残り、赤い飛沫が飛んでいく光景が目の前に広がった。
「……処刑完了。一思いに死ねた事を感謝するんだな」
血を払って槍状の糸を解き、次は他の奴らの援護に行かねばとおぼつかない足で移動しようとする。だがその時、頭がクラッとして視界が歪んだ。意識も朦朧としている。その原因には心当たりしかなかった。
「ああ、そうだ……俺、貧血気味だったの忘れてたわ……」
ここ最近続くドロテアへの報酬で常に血が足りない状態だったのに更に出血で減らして、もはや失血死しても可笑しくない事を失念していた。強化薬の効果やドバドバに溢れていたアドレナリンも切れて、ボロボロになった身体が遂に限界を告げる。
痛覚がないのってこんなに不便なんだな、初めて知ったよ。なんて遠くなっていく意識の中で他人事のようにぼやいてたら、いつの間にか気を失ってぶっ倒れていた。